

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第85集

丸山古窯跡

平成7年度県道住吉・金谷線道路拡幅工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第85集

丸山古窯跡

平成7年度県道住吉・金谷線道路拡幅工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



丸山1号窯 全景

序

^{まるや}丸山古窯跡は、静岡県のはば中央部に位置する島田市の中心部より約3km南の牧之原台地縁辺部南側斜面に立地する遺跡である。平成3年度、島田市教育委員会により発掘調査が行われ、山茶碗を伴う灰原を確認しており、この調査地点より北側斜面上方に山茶碗焼成窯が存在することが予想されていた。

平成7年度になって静岡県島田土木事務所により、県道住吉・金谷線道路拡幅工事が計画され、この地点が工事範囲に含まれるため、静岡県島田土木事務所、静岡県教育委員会、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所とが協議を行い、当研究所が平成7年9月から10月にかけて発掘調査を実施した。

調査の結果、山茶碗焼成窯1基と、炭窯1基を確認し、山茶碗焼成窯は静岡県内でも屈指の大規模古窯跡群である旗指古窯跡群の系譜に連なり、山茶碗の編年でも比較的古い段階に位置していることが明らかになった。丸山古窯跡が立地する地域は、『賣假註^{せうかしゆ}』が成立しており、「藤原永範寄進状案」(『平安遺文』)にみられるように、歴史的にも重厚なところである。また、炭窯も生産分野の研究に新たな視点をもたらすものである。

調査、並びに本書作成に当たっては、静岡県島田土木事務所、島田市教育委員会、静岡県教育委員会をはじめとする関係機関各位に多大な援助・協力を得ている。この場をかりて深くお礼を申し上げる次第である。また、当研究所において、古窯跡の調査は今回はじめて実施したものであり、調査担当者をはじめ研究所職員、現地作業及び整理作業に従事した方々の労をねぎらうとともに、多くの助言・指導をいただいた方々へ、この機会に深くお礼申し上げたい。

1997年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例言

- 1 本書は静岡県島田市湯日中講において実施した、平成7年度県道住吉・金谷線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、静岡県島田土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会の指導の下、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、調査面積400m²を平成7年9月1日から同年10月31日までの2ヶ月間で実施した。
- 3 発掘調査及び報告書刊行に係わる調査体制は下記のとおりである。

現地調査

平成7年度 所長	斎藤 忠
副所長	池谷和三
常務理事	三村田昌昭
調査研究部長	小崎章男
調査研究第二課長	佐野五十三
調査研究員	丸杉俊一郎

整理報告

平成8年度 所長	斎藤 忠
副所長	池谷和三
常務理事	三村田昌昭
調査研究部長	石垣英夫
調査研究第三課長	渡瀬 治
調査研究員	丸杉俊一郎

- 4 調査にあたっては、島田市教育委員会から多大な援助を得た。また、山村 稔、片山巳木男両氏、及び調査地近隣の方々に御理解と御協力を賜った。記して感謝の意を表します。
- 5 本書の執筆は丸杉俊一郎が、遺物写真撮影は楠本真紀子氏（楠華堂）が行った。
- 6 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 7 発掘調査資料は、全て財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

目次

序	
例言	
目次	
第Ⅰ章 調査契機と環境	1
第1節 調査契機と経過	1
第2節 位置と環境	2
第Ⅱ章 遺構	6
第1節 調査方法	6
第2節 丸山1号窯	7
第3節 丸山1号炭窯	14
第Ⅲ章 遺物	17
第1節 概要	17
第2節 分類	17
第3節 遺物出土状況	28
第Ⅳ章 まとめ	30

挿図目次

第1図 島田市の位置	1
第2図 島田市地形図	1
第3図 丸山古窯跡 調査範囲図	2
第4図 島田市南部 地質分類図	3
第5図 丸山古窯跡周辺遺跡分布図	4
第6図 調査区内トレーンチ配置図	6
第7図 丸山古窯跡 遺構全体図	6
第8図 南調査区 調査前地形測量・窯体位置図	7
第9図 丸山1号窯 窯体実測図	9・10
第10図 丸山1号窯 窯内埋土土層図	11・12
第11図 丸山1号炭窯 窯体実測図	15
第12図 丸山1号窯 出土遺物法量分布図	18
第13図 丸山古窯跡出土遺物実測図（1）	21
第14図 丸山古窯跡出土遺物実測図（2）	22
第15図 丸山古窯跡出土遺物実測図（3）	23
第16図 灰釉陶器・「山茶碗」焼成窯跡分布図	32

第17図	旗指21号窯出土遺物実測図	34
第18図	丸山1号窯出土遺物実測図	34
第19図	釜谷古窯跡・白山経塚出土遺物実測図	34

挿表目次

表1	丸山1号窯 窯体法量表	7
表2	丸山1号窯 窯体土層観察表	9・10
表3	丸山1号炭窯 窯体法量表	14
表4	丸山1号炭窯 窯体土層観察表	15
表5	丸山1号炭窯 窯内埋土土層観察表	15
表6	丸山1号窯出土遺物 個体数表	17
表7	丸山1号窯出土遺物 分類別個体数表	19
表8	丸山1号窯出土遺物 降灰観察表	20
表9	丸山1号窯出土遺物 色調別分類表	20
表10	丸山古窯跡 出土遺物観察表	24
表11	丸山1号窯出土遺物 出土地点表	28
表12	丸山1号窯出土遺物 分類別出土地点表	29

図版目次

巻頭図版 丸山1号窯 全景

図版1	1. 調査地遠景	2. 調査前全景
図版2	丸山1号窯 遺物出土状況	
図版3	1. 分焰柱右侧付近 遺物出土状況	2. 分焰柱左侧付近 遺物出土状況
図版4	丸山1号窯 全景	
図版5	1. 焚口・燃焼室	2. 分焰柱
図版6	1. 烧成室床面傾斜状況	2. 前庭部
図版7	1. 丸山1号窯 断ち割り後全景	2. 分焰柱断ち割り後近景
図版8	丸山1号炭窯 全景	
図版9	1. 炭化室奥壁石積状況	2. 炭化室奥壁石積状況
図版10	丸山1号窯 遺物1	
図版11	丸山1号窯 遺物2	
図版12	丸山1号窯 遺物3	

第Ⅰ章 調査契機と環境

第1節 調査契機と経過

平成3年度、島田市教育委員会が県営畠地帶総合土地改良事業による道路拡幅工事に伴い、本調査地の南側隣接地で実施した発掘調査では、「山茶碗」⁽¹⁾を伴う灰原を確認した。そして、平成7年度に棟原郡金谷町から棟原郡吉田町に到る県道住吉・金谷線道路拡幅工事に先立ち、島田市教育委員会の調査成果を受けて、静岡県島田土木事務所・静岡県教育委員会・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の三者協議が成立し、発掘調査を実施した。

遺跡の範囲は、平成元年静岡県教育委員会発行『静岡県文化財地図－焼津市以西－』の（島田-10-117）に記載されたものよりもやや南に広がっており調査面積は400m²となる。調査は現地において平成7年9月1日から10月31日の2カ月間で実施した。調査においては、調査区内にトレンチを設定し、窯体を確認次第それを拡張して窯体の調査に臨んだ。その結果、南調査区では島田市教育委員会が確認した灰原の斜面上方で窯体を検出したが、調査区は南北の幅が狭く調査範囲外に窯体が飛びていた。南調査区の北側は県道が使用されていたため、安全上拡張することは不可能であったが、南側は幸いにも地権者の快諾が得られ窯体調査の進行が可能となった。

調査の結果、南調査区で分煙柱を有する「山茶碗」焼成窯1基、北調査区では炭窯1基を確認し、多大な成果を収める事となった。



第1図 島田市の位置



第2図 島田市地形図

第2節 位置と環境

赤石山脈の標高高く源を発する大井川は、源流・下流部を除き流路は深い峡谷を蛇行し、ほぼ南流して駿河湾に至る、流路延長約180km、流域面積約1,280km²の河川である。上・中流域で様々な表情をつくりだした大井川は下流に至りようやく平地にでるが、その右岸には牧之原台地が形成されている。この牧之原台地は、櫻原郡金谷町北部から御前崎先端までの約25kmにわたっており、その形成は大井川の堆積作用、氷期・間氷期の交替による海面上昇、大井川扇状地での隆起運動によってなされ、一般に洪積台地と呼ばれているもので、牧之原台地は「牧之原疊層」という旧大井川の河床堆積物により構成される。また、牧之原台地は幾つかの大きな開削谷により分岐し西から“二軒家原”、“権現原”、“谷口原”、“岡田原”などと呼称されている。

丸山古窯跡は島田市の中心部から約3.2km南の大井川右岸の台地縁辺部南側斜面、島田市湯日中講に位置し、古窯跡の南約70mには大井川と並行するように東西に湯日川が流れている。この湯日川流域は地形的には平坦な台地面・これをきざむ谷の斜面・谷底平野の3つに区分される。これら基盤の地層は、瀬戸川層群・大井川層群・相良層群と呼ばれるものであり、特に丸山古窯跡が所在する中講地区には瀬戸川層群と大井川層群とを分ける断層が南北に大井川の対岸から連続している。中講地区より下流左岸には大井川層群が、右岸には相良層群が分布している。湯日川周辺の地質をやや詳しく見ていくと、中講地区の断層より上流部では瀬戸川層群静居寺層の頁岩・砂岩および滝沢層が南北の地質構造にそって配列している。湯日川の谷入口にある低地は、大井川によって堆積した砂礫により閉じられた形となり、その内側には粘土・シルトなどが堆積し、一部に泥炭や有機質土が発達している。一方、勾配の急な谷底には砂礫の堆積がみられる。湯日川下流部における沖積層では、表層4~5mが泥炭質の粘土でその下層に砂・砾が混入し、砂礫に移り変わりその厚さは10m以上になる。



第3図 丸山古窯跡調査範囲図



第4図 鳥田市南部 地質分類図(「しまだの自然環境」1983を加筆・再トレース)



1	丸山古窯跡	9	吹木原遺跡	17	本村原古墳群
2	丸山Ⅰ古窯	10	唐沢原遺跡	18	手段遺跡
3	御小屋原Ⅱ遺跡	11	唐沢原古墳群	19	原ノ平遺跡
4	御小屋原古墳群	12	屋敷原遺跡	20	ミョウガ原遺跡
5	御小屋原Ⅰ遺跡	13	奥ノ沢古墳群	21	湯日城
6	西原遺跡	14	風西遺跡	22	船山古墳
7	双川遺跡	15	東鎌塚原遺跡	23	長軒屋遺跡
8	叶釘山古墳群	16	本村原遺跡		

第5図 丸山古窯跡周辺遺跡分布図

本古窯跡が立地する周辺は、牧之原台地平坦面上を中心に、縄文遺跡が数多く分布する地域である。本古窯跡より北側から東側にかけて、屋敷原遺跡、東鎌塚原遺跡、風西遺跡などが存在する。屋敷原遺跡では縄文時代前期の住居址2軒、東鎌塚原遺跡では縄文時代中期後半の多角形住居址3軒が検出され、特に東鎌塚原遺跡1号住居址は本古窯跡の西側に立地する御小屋原I遺跡1号住居址でも検出された6角形を呈する住居址であることが注目される。また、風西遺跡では縄文時代後・晩期の遺物が数多く出土し、石棒・石劍などの呪具も出土している。西側では有舌尖頭器が出土した双川遺跡や西原遺跡などが存在する。

弥生時代の遺跡は、この地域では非常に希薄となり湯日川下流域に点在するのみである。古墳時代には台地縁辺部南側に、西から叶釣山・御小屋原・奥ノ沢・本村原などの古墳群が存在しており、いざれも規模が大きいとはいえないが、御小屋原3号墳よりは忍冬唐草文透巻鏡板と杏葉が出土していることが注目される。奈良時代以降はさらに遺跡の分布はすくなく、湯日川右岸に丸山1号塚が存在しているが操業時期・規模・基數等の詳細は不明である。

本古窯跡周辺は縄文時代以降、小規模の墓域・生產城がみられるのみで遺跡の分布は激減しており分布の中心は湯日川中・下流域へと移動していく。特に牧之原台地の「権現原」と呼ばれる台地東端には片袖式横穴式石室をもつ前方後円墳の愛宕塚古墳、6世紀代の群集墳である谷口原古墳群、豊富な副葬品が出土した高根森古墳群、手握土器・石製模造品等の祭祀遺物が出土した沼伏遺跡などが特筆される。湯日川を挟んだ対岸には、奈良時代前半に建立された竹林寺庵寺や南原瓦窯跡などの古窯跡が存在しており、さらに「権現原」東端には式内社の敬満神社が鎮座し、そこに存する宮上遺跡では「驛」と記された墨書き器が出土していることから初倉駅家との関連が注目される。

島田市湯日を含む地域は古代末から中世にかけて質借莊が存在した地で、現在の櫻原郡金谷町・島田市湯日・阪本・大柳一帯を莊域としている。質借莊は、はじめ質借牧といわれ長元四(1031)年～長暦二(1038)年頃に遠江守であったと推定される大江公資がこの地を私領とすることで成立した莊園である。大江公資は長暦年中(1037～1040)、上級權門の藤原道長の六男長家に当牧を寄進し、長家が本家(本所)となり、大江公資は預所(領家)となった。その後、本家職は藤原長家から藤原信長・俊家・宗俊・宗忠へ、預所職は大江公資から大江広経・広経の女を介して外孫藤原永実へ相伝された。

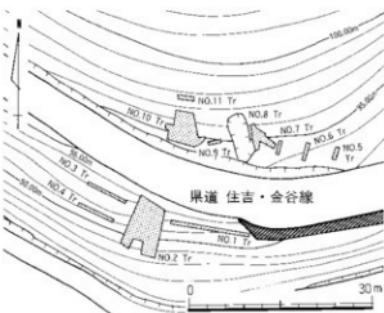
天永三(1112)年、本家藤原宗忠は一切経書写料の費用にあてるため、本家職を預所の藤原永実に売却し、質借牧の領有権は藤原永実に一元化された。藤原永実の後、質借牧本家職・預所職は藤原永範に相伝されるが、承久元(1113)年に遠江守源基俊により当牧は取公の危機にさらされるなど、藤原永範の力だけで守り通せるものではなく、上級權門の權威に頼る必要があった。そのため、藤原永範は大治三(1128)年八月に質借牧本家職を待賢門院の御願寺である円勝寺に寄進することで当牧の確保を意図したのである。円勝寺への寄進は経営を担う待賢門院庁であり、それは鳥羽天皇の中宮・藤原璋子、ひいては鳥羽上皇への寄進と密接に関連がある。こうして、質借牧は円勝寺、実際には経営する待賢門院庁を本家、藤原永範を預所とし、寺家に年貢米300石を進上することで院領莊園となつた。待賢門院庁はただちに四至の検注を行い質借莊として立券し、この時の立券文案では莊域は山畠野山などを合わせて約1700町に及ぶ広大なもので、その領域内には質借郷・湯日郷・大楊郷が含まれている。

その後、藤原永範は預所職を三分割し、本家預所職を嫡男藤原光範、湯日郷預所職を嫡女、大楊郷預所職を三女に譲与し、以後3つに分割されて相伝していく。しかし、承元三(1209)年湯日郷はその預所職を藤原隆兼の嫡男有夜又(僧宗性)が相伝するはずであったが、後鳥羽上皇は有夜又が幼少であったこともあり、湯日郷預所職を院女房伊与局に給してしまい、湯日郷は取公されてしまう。宗性はその後、湯日郷の返還を計るもの果たせざりに終わったが、収集した質借莊関係の文書は宗性が撰述した書物の用紙として使用、いわゆる紙背文書として質借莊の経営経過が現在知られる⁴⁴。

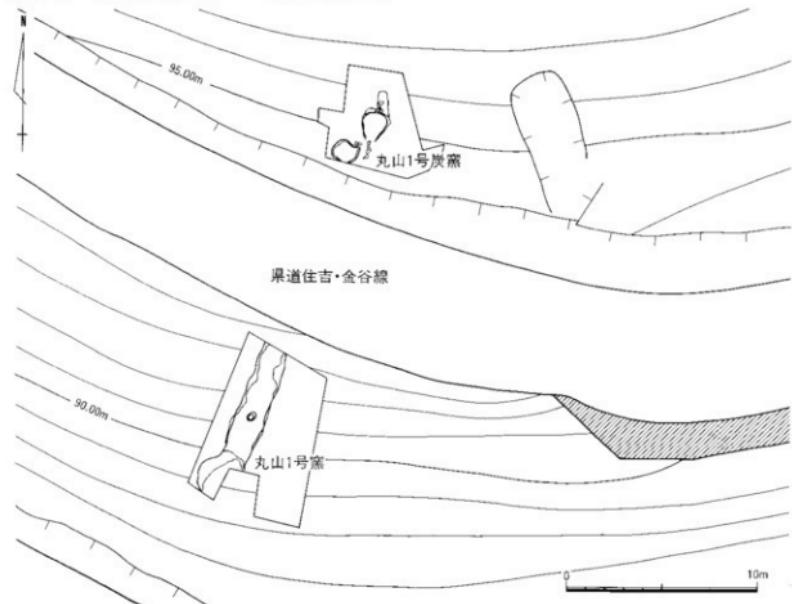
第II章 遺構

第1節 調査方法

調査は島田市教育委員会の調査成果を受け調査区内にトレントを設定して、窯体とその関連施設の確認に努めた。その結果、第2-10トレント以外は遺構は認められなかったので面的調査は行わず窯体調査に主眼をおいた。トレント掘削・窯体の掘り下げ等は全て人力で対応した。検出した窯体・前庭部には窯体中軸に沿った主軸を設定し、セクションベルトを残して掘り進め、窯内土層断面図を作成し、同時に窯体・前庭部の精査を行った。続いて、遺構の測量、写真撮影、断ち割り調査を行い、トレントを埋め戻して現地調査を終了した。なお、実測は全て手実測、縮尺は基本的に1/20で作成し土層色調の概観は従来通有の呼称と農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1992年版を併用した。



第6図 調査区内トレント配置図



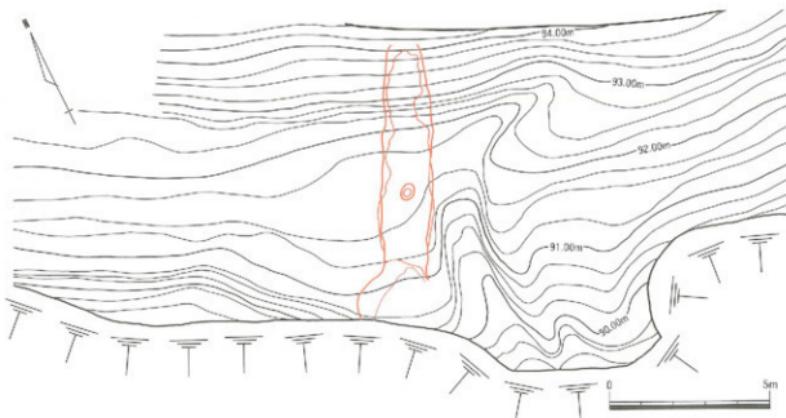
第7図 丸山古窯跡 遺構全体図

第2節 丸山1号窯

丸山1号窯は標高90~94m付近の南側斜面に構築されており主軸はN-22°-Eである。窯体は天井部が既に崩落していたが、分煙柱・焼成室側壁などは比較的良好に遺存していた。窯内の埋土状況をみると焼成室天井中央部付近がまず崩落し、その後砂質土の流入と天井部の崩落が続いて窯体が埋没した様子が窺え、埋土充填により窯体・前庭部が良好に遺存したものと思われる。しかし、窯体に向かって前庭部後方の南斜面は削岩により、燃焼室東側の右側壁は旧山道により一部破壊されていた。また、煙道部付近は県道下に残存していると思われるが未調査である。そのため、調査区内で残存する窯体全長は6.42m、最大幅1.58mである。窯体構造は、燃焼室・焼成室の境に分煙柱を設置し、窯体床面平面プランは短冊状となる半地下式の窯である。なお、断ち割り調査によって確認できた床面は一面のみであり、側壁などの補修は認められなかった。

表1 丸山1号窯 窯体法量表

主 軸 長 (m)			窯 体 幅 (m)			分 煙 柱	傾 斜 角	比 高	主 軸 方 位
全長 (調査区内)	燃焼室	焼成室	焚口	焼成室 最大幅	燃焼室・ 焼成室の境	基底径 (cm)	燃成室床面 中央		
6.42	1.64	4.78	1.35	1.57	1.58	47×33	20°	1.8 (m)	N-22°-E



第8図 南調査区 調査前地形測量・窯体位置図

焚口

窯出し時に撤去されたのか、それに関連するものは遺存していない。燃焼室床の被熱面が途絶える位置が焚口にあたると思われ、床面幅は1.35mである。

焼成室

焚口部から分焰柱に向かい次第に幅を増加させていく、分焰柱下端まで被熱赤化しており、そこまでを焼成室とすると分焰柱下端で最大幅1.58m、主軸長1.64mである。床面はほぼ平坦で被熱のため赤化していたが、床表面は剥離しやすい状況であった。床は地山を掘り込んだ面をそのまま床面としており、床表面より8cmほど地山が赤化している。床面を補修した跡は認められない。

側壁は床面よりやや外傾して立ち上がり、左側壁は床面より30cm程度の高さまで遺存していた。被熱のため赤化しており、やや硬化していた。側壁も床と同様、掘り抜いた地山をそのまま壁面としており、側壁表面より10cmほど地山が赤化していた。側壁を補修した跡はみられない。

床面上には薄く炭が堆積しており、「山茶碗」が遺棄された状態で出土している。

分焰柱

分焰柱は、焼成室に向かってやや東に振れており基底部の形状は橢円形を呈する。規模は基底部で長径47cm・短径33cm、遺存する上端で長径32cm・短径26cmとなる。また、遺存する高さは57cmである。分焰柱の遺存状況は良好であり、焼成室から分焰柱にかけての窯内埋土状況をみると比較的天井部の崩落土を多く含まないことから、製品の窯出しの際には、分焰柱を基底部から除去することなく天井を破壊して窯内に入ったと考えられる。分焰柱の構築には、地山の燃焼室側をやや下げ、なだらかで浅い皿状に掘り残して基底部としている。そこに木材を打ち込み、分焰柱を構築する際の芯としている。樹種は不明であるが、地山に打ち込んだ先端部分は炭化状態で残存していた。その炭化状先端部は6cmほど地山へ打ち込んでおり、地山から7cmほど上部まで確認できた。また、炭化状先端部の上部延長に木芯痕が確認でき、分焰柱を構築する際に芯とした木材は長さ約36cm・径約5cmの木材を使用したことが明らかとなった。この芯の周囲に粘質土を貼り付け分焰柱を設置しており、表面は還元をうけて灰色を呈する。分焰柱下部の地山は中心部にいくほど締まりが弱く赤化もうずくなる。分焰柱を再構築・修復した跡は認められない。

分焰孔は左右とも天井部が崩落しており、その規模は不明であるが幅は遺存した部分で左側が65cm、右側が63cmである。床面プランは分焰孔に到ると、左側分焰孔はさらに幅を増加させているが、右側分焰孔は燃焼室で幅を増加させたものが分焰孔に到ると幅を狭めている。

分焰柱付近の床面上でも「山茶碗」が遺棄された状態で出土している。

焼成室

焼成室は、燃焼室である床面の被熱赤化が途絶えた部分から調査区端までの主軸長4.78m、最大幅は焚口より3.5mの位置で1.57mである。その部分より煙道部に向かい次第に幅を狭めていく。そこでは、床面の左側プランは窯体主軸からほぼ一定した距離を保っているが、床面右側は焚口より4m前後を境に急に内側へ向かい距離を狭めている。また、県道のため調査には及ばなかったが焚口より6.2mほどで焼成室はさらに幅を狭めて煙道部に向かっていることまでは確認できた。焼成室内の埋土を除去すると、直ちに被熱硬化した面が現われた。表面より黒灰色、褐色、淡褐色、濃赤色、暗赤褐色に変色しているが特に表面の黒灰色部が激しく熱を受け、極めて強く硬化している。これらから、地山を掘り込んでそのまま床として使用しており、床表面が強く熱を受け硬化しているので床面には貼床を施さなかった

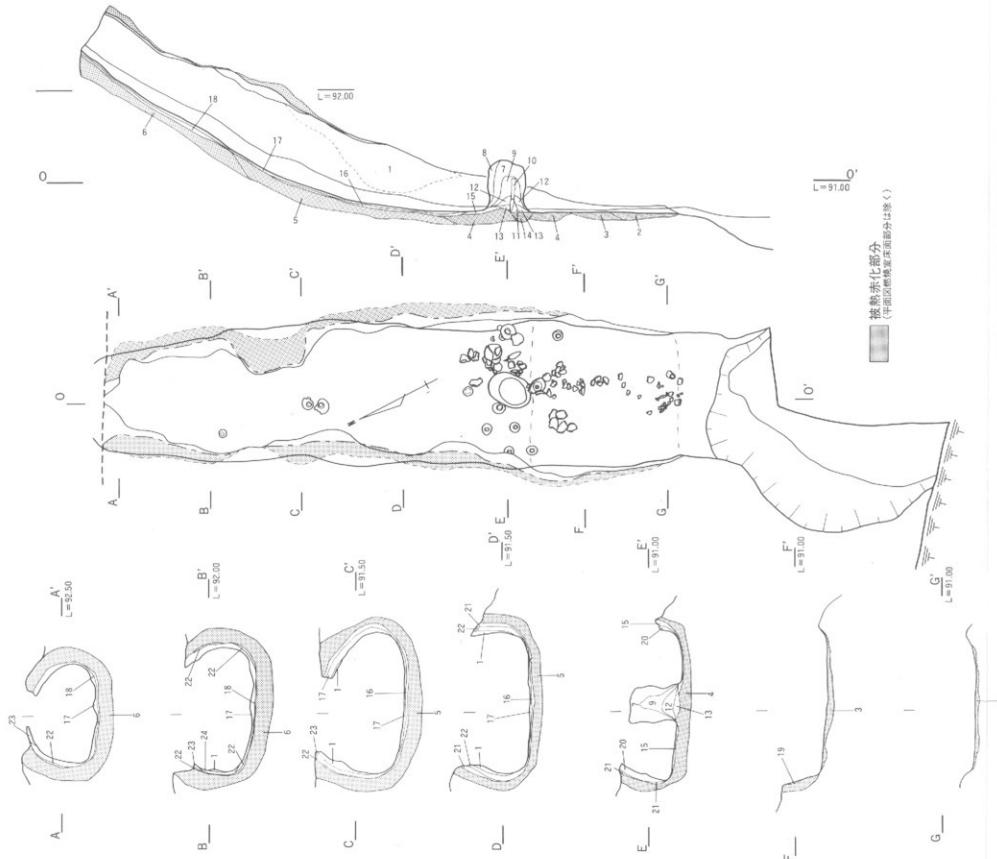
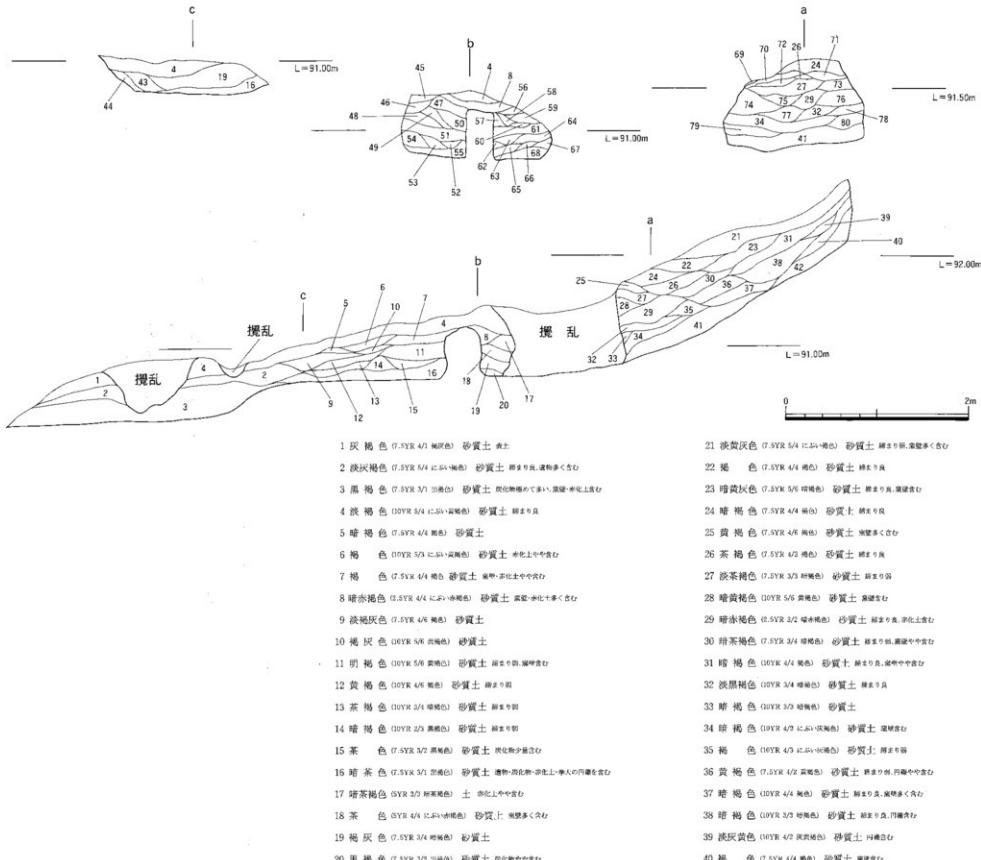


表2 袁山1号煤 窑体层勘探表

层名	次序等	厚度	特征	层名	次序等	厚度	特征
1 黑黑色	0.65(0.5-0.75)	微皱	块状风化	13 浅红色	0.35(0.4-0.45)	分带性	黑山?
2 浅灰色	0.25(0.2-0.3)	颗粒状	块状风化	14 浅灰色	0.58(0.6-0.65)	分带性	黑山?
3 浅灰色	0.25(0.2-0.3)	颗粒状	块状风化	15 页理带	0.25(0.2-0.3)	分带性	黑山?
4 浅灰色	0.25(0.2-0.3)	颗粒状	块状风化	16 带灰黑色	0.25(0.2-0.3)	分带性	黑山?
5 深灰色	0.25(0.2-0.3)	颗粒状	块状风化	17 浅灰色	0.35(0.3-0.4)	分带性	黑山?
6 浅灰色	0.25(0.2-0.3)	颗粒状	块状风化	18 浅灰色	0.25(0.2-0.3)	分带性	黑山?
7 灰色	0.7(0.6-0.8)	颗粒状	块状风化	19 页理带	0.25(0.2-0.3)	分带性	黑山?
8 浅褐色	0.35(0.3-0.4)	颗粒状	块状风化	20 白色	0.25(0.2-0.3)	分带性	黑山?
9 灰白色	0.58(0.5-0.6)	少颗粒	块状风化	21 白色	0.7(0.6-0.8)	分带性	黑山?
10 深灰色	0.58(0.5-0.6)	少颗粒	块状风化	22 浅灰色	0.35(0.3-0.4)	分带性	黑山?
11 深褐色	0.35(0.3-0.4)	少颗粒	块状风化	23 浅白色	0.35(0.3-0.4)	分带性	黑山?
12 深黑色	0.35(0.3-0.4)	少颗粒	块状风化	24 浅白色	0.35(0.3-0.4)	分带性	黑山?

第9图 袁山1号煤 窑体实测图



第10図 丸山1号窓 塚内埋土層図

- 41 淡茶褐色 (GYR 3/3 对地) 砂質土 黒茶の多く含む
 42 黄褐色 (GYR 4/6 黄褐色) 砂質土
 43 淡茶褐色 (GYR 4/3 にほい褐色) 砂質土 砂より多く含む、黒茶・化生土含む
 44 黄褐色 (GYR 4/6 黄褐色) 砂質土 砂より多く含む
 45 黑褐色 (GYR 4/1 黑褐色) 砂質土 砂より多く含む
 46 茶褐色 (GYR 4/3 にほい褐色) 砂質土 砂より多く含む
 47 喀褐色 (GYR 3/1 黄褐色) 砂質土
 48 茶褐色 (GYR 3/2 黄褐色) 砂質土
 49 暗褐色 (GYR 4/3 黄褐色) 砂質土
 50 淡茶褐色 (GYR 3/4 黄褐色) 砂質土
 51 淡褐色 (GYR 3/2 黄褐色) 砂質土
 52 淡褐色 (GYR 3/6 黄褐色) 砂質土
 53 灰褐色 (GYR 4/4 黄褐色) 砂質土 砂より多く含む
 54 淡黄褐色 (GYR 4/5 黄褐色) 砂質土
 55 喀茶褐色 (GYR 3/2 黄褐色) 砂質土
 56 淡茶褐色 (GYR 3/4 にほい褐色) 砂質土
 57 茶褐色 (GYR 3/4 黄褐色) 砂質土
 58 茶褐色 (GYR 4/2 黄褐色) 砂質土 黑茶・化生土含む
 59 明褐色 (GYR 3/6 黄褐色) 砂質土
 60 暗茶褐色 (GYR 4/3 にほい褐色) 砂質土
 61 喀茶褐色 (GYR 3/4 黄褐色) 土
 62 淡褐色 (GYR 4/4 黄褐色) 土
 63 茶褐色 (GYR 4/4 黄褐色) 土
 64 暗褐色 (GYR 3/2 黄褐色) 砂質土
 65 淡茶褐色 (GYR 4/2 黄褐色) 砂質土
 66 淡褐色 (GYR 3/4 黄褐色) 砂質土
 67 黑褐色 (GYR 4/4 黑褐色) 砂質土
 68 淡茶褐色 (GYR 3/2 黄褐色) 砂質土
 69 灰褐色 (GYR 4/2 黄褐色) 砂質土
 70 黄褐色 (GYR 4/4 黄褐色) 土
 71 淡茶褐色 (GYR 3/2 黄褐色) 砂質土
 72 淡褐色 (GYR 3/3 黄褐色) 砂質土
 73 茶褐色 (GYR 4/3 にほい褐色) 砂質土
 74 淡茶褐色 (GYR 4/3 黄褐色) 砂質土
 75 茶褐色 (GYR 4/3 オリーブ褐色) 砂質土
 76 暗褐色 (GYR 3/2 黄褐色) 砂質土
 77 茶褐色 (GYR 4/2 黄褐色) 砂質土
 78 暗茶褐色 (GYR 3/2 黄褐色) 砂質土
 79 淡茶褐色 (GYR 3/3 オリーブ褐色) 砂質土
 80 淡褐色 (GYR 4/4 黄褐色) 砂質土

と考える。この床には掘り込んだ際の調整跡と思われる細い筋が幾条もみられ凹凸が激しい。それは特に、焚口より3.9m付近より上部で顕著にみられる。そのため、焼台を用いて焼成しなければならないが、焼台は貼床上に設置するのではなく、ここでは地山に直接焼台を貼り付けて焼成したものと思われる。窯出し時に除去したのであろうか焼台は今回の調査では出土していない。また、焼成室前部は平坦に調整しているがら中・後部は凹凸を残しているが、その差違の要因は不明である。なお、断ち割り調査の結果からすると、焚口から4.6m付近以上の赤化していない地山は、それ以下の地山よりも硬質で岩盤状を呈しており、この部分で床面がやや隆起している。地山の硬質差が床面を平坦にする際の難易さにあらわれたとも思われる。

なお、床面は1面のみである。

窯体床面傾斜角度は焚口から3m前後までの焼成室はほぼ平坦であるが、そこより奥に向かうに従い傾斜を増加させていく、3m付近で約10°、3.8m付近で約20°、4.4m付近より上部では約30°となる。

側壁は、一部天井部にかかる部分が残存しており、後部にいくほど側壁の遺存状況は良好である。調査当初、左側壁4.5m～5.5m部にも天井部にかかる側壁が遺存しており、床面から天井の高さを推定すると、焚口より4.5m付近で85cm前後と復元できるが、残念ながら調査途中に崩落してしまった。両側壁とも焚口より2.2m～4.2m付近に自然釉がかかり、ガラス状に溶けて光沢のある黒灰色を呈する。断ち割り調査の結果では貼壁を施した痕跡は確認できないことから、側壁は窯体を掘り込んだ際の地山面をそのまま側壁として使用したものとみられる。側壁の立ち上がりをみると、左側壁は床面よりゆるやかに立ち上がるが、右側壁は床面より短く急に立ち上がり、天井部に向かい急激に内傾している。

側壁でも焼成室後部に向かうほど硬質化していく、床面と同様に黒灰色に変色して極めて強く硬質化している。また、焚口より3.8m～5.1m付近の焼成室中・後部床面・側壁ともに地山の被熱赤化部分はひろく、焼成室前部は被熱赤化部分を比べるとややせまい。しかし、焼成室の同一箇所において床と側壁上部の被熱赤化部の範囲はほぼ等しい。

焼成室内でも遺棄された状態で「山茶碗」が出土したが、原位置を保つものではない。また、前記したように焼台は出土せず、焼台の位置を示す痕跡すら確認できなかった。

前庭部

前庭部は、南側が斜面掘削のため破壊され、東側は調査区範囲外、近・現代の山道利用による破壊を受けているため西半部のみの調査となった。前庭部の残存長2.6m、調査区内で最大幅1.9mの規模で検出され、前庭部の幅は窯体中軸線を延長して反転すると推定2.5m前後になるとみられる。平面で橢円形を呈しており、焚口より30cm南で地山を掘削して前庭部を作り出している。床面はほぼ平坦であるが、中央部に向かってやや下がり平坦面は南方向に下り傾斜となる。平坦面上に30cm程の灰層が堆積しており、その上を窯内からの流入土が覆っていた。灰層は單一層で間層をはさまない。灰層中より多量の「山茶碗」が出土したが、灰層上面より出土するものが多く、下面から出土するものはほとんどない。このことは、「山茶碗」を焼成した後の窯出しの際の過程を示しており、燃焼室内の灰などを窯外の前庭部へ搔き出した後、窯内へ入り不良製品を前庭部に投棄して、廃窯後さほど時間を経ずに窯内の流入土に覆われたと思われる。

第3節 丸山1号炭窯

丸山1号炭窯は、県道北側の標高95～96m付近に立地しており、窯体主軸はN-23°-Eである。天井部は崩落していたが、炭化室奥壁・煙道部の石積が比較的良好に遺存していた。窯体構造は、焚口・炭化室・煙道部をもち、煙道部を含めて全長2.7m、最大幅は炭化室で1.4mの規模で、地山を掘り込んで天井を高架した半地下式窯である。窯内埋土中には河原石が多く含まれ、廃窯後しばらく砂質土が窯内に流入した後、天井部・側壁が崩落したものである。床面の平面プランはイチジク形を呈している。窯体の焚口南側では石列がのがびて前庭部が確認され、そこより土坑1基を検出した。

窯体の特徴から、黒炭を製造した“土窯”と呼ばれる炭窯と思われるが、出土遺物が皆無であるため詳しい時期は明らかでない^註。

表3 丸山1号炭窯 窯体法量表

主 軸 長 (m)			窯 体 幅 (m)			排煙口	床面積	比高	主軸方位
全長 (掘方含む)	炭化室	煙道部	焚口	炭化室 最大幅	煙道部 最大幅				
2.7	1.5	1.2	0.4	1.4	0.32	11×20 (cm)	炭化室 1.45 (m ²)	0.6 (m)	N-23°-E

焚口

幅40cmであり、床面は茶褐色を呈する。両側に河原石を用いて焚口入口としている。

炭化室

規模は主軸長1.5m、最大幅は焚口より96cmの位置で1.4mとなる。床面は暗赤褐色に発色しており、地山を掘り込んだ面をそのまま炭化室床面として使用している。この床面の被熱赤化の幅はせまく、さほど硬化していない。炭化室床面はほぼ平坦であるが若干、煙道部に向けて傾斜を上昇させている。床面に貼石・貼床の痕跡は確認されない。

側壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がり、側壁下部表面は淡灰色に発色するが上部に向かうと赤色を呈する。ともに地山が熱を受け変色したものである。被熱赤化が及ぶ範囲は側壁ではほぼ一定した幅を保っている。

焚口から主軸長で1.2m付近の左側壁からは、壁面が2面確認された。検出当初、壁を修復したものと思われたが、断ち割り調査と炭化室奥壁の石積の観察から2面みられた壁面は外側の壁は地山、内側の壁は炭化室奥壁の石積のための貼壁であることが明らかとなった。貼壁は高さ50cmほどの範囲に施され、熱を受けて地山被熱部分とかわらない発色だがより硬質化する。また、窯体の断ち割り調査では貼壁をした厚さは16cmであり、淡灰色・赤褐色に変色した後、被熱赤化部分は及ばなくなり地山である明褐色砂質土となる。貼壁は炭化室奥壁の石積に及んでおり、この貼壁材を各石の間に交互にはさんで構築している。そのため石積の各石が互いに接することは最下段と第4段の石以外はない。この貼壁は石積を施すことを主眼においたものであり、貼壁よりも外側では地山の赤化は認められずその被熱赤化部分も1面のみであることから、石積の構築は1度限りであったとみられる。炭化室右奥壁にも煙道部との境

表4 丸山1号炭窯 窯体土層観察表

層名	状況等
1 暗赤色 (G.SYR 4/6 布滿色)	地山、被熱
2 淡灰色 (GYR 4/1 被水色)	貼壁
3 褐褐色 (G.SYR 4/8 布滿色)	貼壁、被熱赤化
4 赤褐色 (GYR 4/6 布色)	床面
5 赤灰色 (GYR 5/4 布色)	地山、被熱赤化
6 淡赤色 (GYR 5/4 布色)	地山、被熱赤化
7 灰褐色 (GYR 6/2 沈水褐色)	側壁、地山
8 暗赤色 (GYR 5/4 布色)	地山、被熱赤化

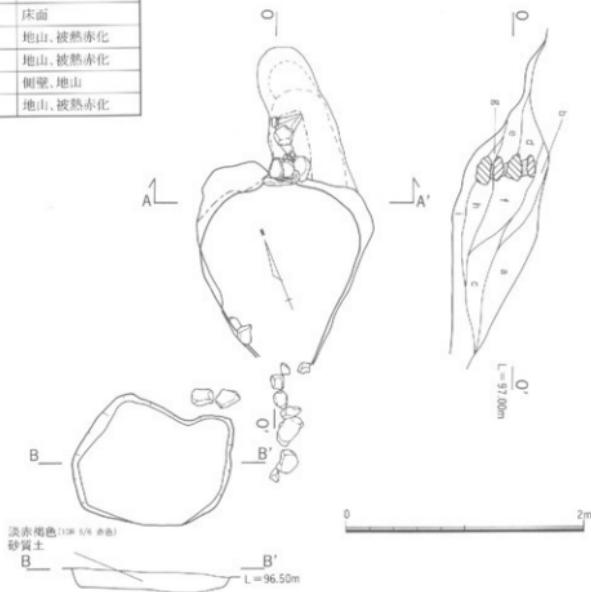
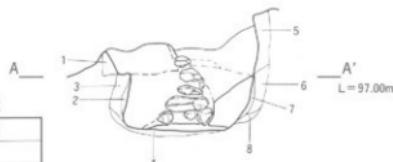


表5 丸山1号炭窯 窯内埋土層観察表

層名	状況等
a 淡灰色 (GYR 4/1 被水色) 砂質土	縮まり弱
b 暗灰色 (GYR 5/1 被水色) 砂質土	縮まり弱、赤化土含む
c 淡灰色 (GYR 5/1 布滿色) 砂質土	縮まり弱、円礫多く含む
d 灰褐色 (GYR 4/1 布滿色) 砂質土	縮まり弱
e 增黄褐色 (GYR 4/6 C.黄褐色) 砂質土	縮まり弱
f 淡赤色 (GYR 4/6 布色) 土	赤化土多く含む
g 赤褐色 (GYR 4/4 布滿色) 土	赤化土多く含む
h 褐褐色 (GYR 4/4 布滿色) 砂質土	円礫含む
i 赤褐色 (GYR 4/4 布滿色) 上	赤化土多く含む

第11図 丸山1号炭窯 窯体実測図

に貼壁を用いたと思われるが、すでに崩落して奥壁下部の地山被熱面のみが残存していた。

炭化室奥壁の石積は5段残存していた。そのうち最下段と第4段以外は、前記したように貼壁材を間にはさんでいるため各石が接しない。第1～3段の石は10～20cmほどの扁平な河原石を用いて構築している。第4段の石も河原石を用いておりやや大きめで、熱により亀裂が生じている。この第4段の石の両側下部に、第5段の拳大程の河原石を縦に2個置き煙道部につながる排煙口を設けている。排煙口は幅20cm、高さ11cmの規模である。

検出当初、拳大程の河原石が窯内埋土に多く含まれ、炭化室奥壁では石積がみられるため炭窯の種類の中でも白炭を製造した“石窯”であると思われたが、床面・側壁ともに石積は確認されず側壁を当初より粘質土を貼り付けていることから土窯であるという結論に達したが、なお検討の余地はある。窯内埋土中に多く見られた河原石も“土窯”であっても石材を使用することは皆無であったわけではなく、補強のために多くの河原石が使用されたと思われる。

煙道部

煙道部でも石積を確認しているがそれをみると、石積は右煙道部のみ構築され、左煙道部は地山を掘り込んだものをそのまま使用している。そのため左煙道部は地山の表面のみ赤化している。右煙道部の石積には部分的に煤が付着しているが、石積が何段構築されていたかは不明である。

煙道部には掘り方を3段有しており、炭化室に最も近い掘り方に石積を設けている。これ以外の掘り方は煙道部を掘削し石積を構築する際に次第に地山を掘り下げていったものである。また、掘り方は右側が大きく発達しており、左煙道部は地山、右煙道部は石積構築で利用する築造計画を示している。

煙道部石積内の傾斜は炭化室奥壁より急に傾斜を増加させており、また、煙道部の幅は次第に減少していく、石積が地山の煙道部と接する主軸長2m付近の位置で立ち上がり、窯外への煙突口が存在したと推定される。

前庭部

前庭部は、南側が県道の法面により斜面が削られているため全容は解明できない。しかし、焚口より石列がのびており、この範囲を前庭部と判断した。石列は焚口中央より南北方向に向かいのびているものと焚口左側から東西方向にのびているもの、計2条が検出された。南北方向の石列は残存したもので1m、東西方向のものは40cmである。前庭部床面はゆるやかに南に向かい下がっている。

この前庭部より、長径1.3m・短径0.9mの土坑を検出した。土坑は赤色砂質土を埋土しており、埋土中よりは炭化物が検出されなかったため、窯内で製造した炭を焼き出したものでないことは明らかであるが、その用途については不明である。

第III章 遺 物

第1節 概 要

今回の丸山古窯跡の調査では、丸山1号窯が存する南調査区で「山茶碗」が出土しており北調査区では須恵器片を4点出土しているに過ぎない。よって、この章では丸山1号窯出土遺物を中心に記述を進めていく。

丸山1号窯では窯内・前庭部より、底部1/2以上を1個体とすると、総数100点の「山茶碗」が出土している。古窯跡の調査としては出土遺物量は少ないが、平成3年度の島田市教育委員会の灰原調査の出土遺物を含めれば丸山1号窯での遺物の実数はさらに増加する。出土遺物は「山茶碗」の碗とそのセットとなる小碗が殆どであるが、その他に輪花小碗が少量出土し、底部が残存していないため個体数としてはカウントしていないが大形碗と思われるものが1点みられる。出土した碗は48点、小碗は47点、輪花小碗は5点であり、碗・小碗で全体の9割以上を占め、碗・小碗はほぼ同じ構成比である。

なお、今回の丸山1号窯の調査では焼台・窯道具類は出土していない。

遺物は、窯内・前庭部を中心に出土し、各遺構ごと取り上げを行っている。以下、全体を通じての分類を行い、その分類を基に遺物の記述を行う。

表6 丸山1号窯出土遺物 個体数表

器種	碗	小碗	輪花小碗	計
個体数	48	47	5	100
構成率	48%	47%	5%	100%

※個体数は、底部1/2以上残存しているものを計測

第2節 分 類

碗・小碗をあわせて概観すると碗・小碗・輪花小碗のいずれも無釉で底部外縁に付高台を有しており、底部外面に糸切り痕が観察されるものが碗を中心にみられる。体部内外面は丁寧な回転ナデ調整で平滑に仕上げており、底部内面は小碗ではその中央に未調整部分が突起状に残り、碗ではやや凹み器壁も若干薄くなる。高台端には乾燥時に、棒状の板製品上で乾燥させたと思われる通称“スノコ痕”が大多数確認でき、粗穢痕は確認されないことが出土遺物のほぼ共通した要素である。

(1) 碗

碗は無釉で付高台を有し、底部外面は付高台の際に底部外周が回転によるナデで糸切り痕は消されるが、底部中央は糸切り痕がやや明瞭に残る。高台は底部外縁に回転によるナデ調整で付けられやや高い高台を有しているが、底部との接合は粗雑である。高台の形状は、外面はやや外に開き気味で内面は外傾しており、高台端にはほぼ例外なく“スノコ痕”が確認でき粗穢痕はない。体部は比較的丁寧な回転

ナデ調整で平滑に仕上げているが、体部外面には回転ナデ調整がやや顕著に残るものもある。

土胎は緻密だが微砂粒をやや含む。色調は灰白色系、暗灰色系の両者があり、後者の方が多い。焼成は全体的に良好であるが、明らかに焼成不良なものも存在する。

全体の形状が明確な資料はさほど多くはないが、体・口縁部を基準に分類した。高台部は焼成前に上からの加圧によりつぶれたり、焼成の際に自然釉がかかり高台端部が熔着し剥落しているもの多いため分類の要素から除外した。

A類—体部が湾曲し体部下半が張るもの。口縁部は外反するがその程度の差により、外反するもの(A 1類)、外反が弱いもの(A 2類)が見られる。A 1類は口縁部が強く外反する分、口径がA 2類に比してやや大きい。

A 1類(1~4) 口径 約17.0cm 器高 約6.5cm 高台径 約8.0cm

A 2類(5~8) 口径 約16.0cm 器高 約6.5cm 高台径 約7.5cm

B類—体部の湾曲がやや弱く体部下半はさほど張らない。口縁部の形態により3つに分類でき、やや外反するもの(B 1類)、外反が弱いもの(B 2類)、外反せずにそのまま立ち上げるもの(B 3類)となる。口径・器高ともA類と近い値を示すが、底径が小さいものはやや深い形態という印象を受けるものも含まれる。

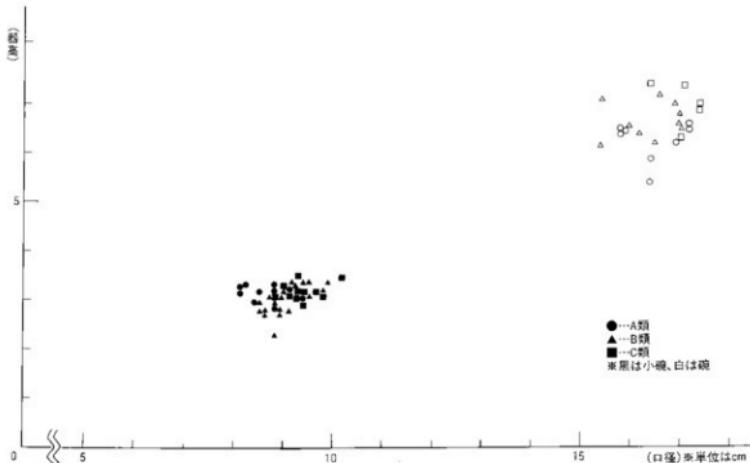
B 1類(9~13) 口径 16.5~17.0cm 器高 6.5~7.0cm 高台径 7.3~8.5cm

B 2類(14~17) 口径 15.4~17.1cm 器高 6.2~6.9cm 高台径 7.3~8.0cm

B 3類(18) 口径 16.2cm 器高 6.4cm 高台径 6.9cm

C類—体部は湾曲が弱く直線化の傾向にあり、口縁部の外反が極めて弱いもの。器高が最も高くなる。

C類(19~23) 口径 16.4~17.4cm 器高 6.3~7.4cm 高台径 7.6~8.4cm



第12図 丸山1号窯 出土遺物法量分布図

碗は以上、3分類したがその構成比をみていくと、A・B・C類それぞれ35%、43%、22%となる。体部の形状を重視すると、A類は体部全体が湾曲し、C類は体部全体がやや直線化傾向を示し、B類は両者の中間的形態を有しており体部下半の湾曲が弱く、上半はやや屈曲して立ち上がるものが多い。ただし、B類はA類の湾曲のI形態と理解できるが、C類の直線化傾向の体部とは指向性が異なるものと思われる。また、A類とB類は分類不明瞭なものもあり、同一型式の範疇として捉えることが可能なほど両者には類似性が窺える。そのため、碗類で体部の湾曲を指向したものは全体の約3/4を占めることとなる。

(2) 小碗

小碗も無釉で底部外縁に高台を有する。底部外面はほとんどが高台を付ける際に糸切り痕を消したと思われ、糸切り痕を明瞭に残すものはない。高台は回転によるナデ調整で付けられ、外面はほぼ直立し内面は外傾する形状となる。高台と底部の接合は非常に粗雑である。小碗においても高台端部にはスノコ痕が認められ板殻痕をもつものはない。体部は比較的丁寧で平滑に仕上げており、底部内面中央に未調整部分が突起状に残るものが多い。

胎土は緻密だが微砂粒を含むものが多い。色調は碗と同様に、灰白色系、暗灰色系の両者が存在するがここでも後者の方がやや多く確認される。焼成は良好なものが多いが焼成不良なものも若干存在する。

なお、輪花小碗は輪花を整形する際、内面を指頭で押さえながら外面にヘラ状工具を用いて施しており、形態は小碗と変わることはない。

碗と同じく体・口縁部の形状により、以下のように分類できる。

A類一体部はやや湾曲して、口縁部をそのまま立ち上げるもの。

A類 (24~38) 口径 8.1~9.3cm 器高 約3.0cm 高台径 4.6~5.4cm

B類一体部中位で屈曲して立ち上がるもの。口縁部の形状により細分でき、口縁部をわずかに外反させるもの (B 1類)、口縁部をそのまま立ち上げるもの (B 2類) に分類される。

B 1類 (39~48) 口径 8.5~9.5cm 器高 2.3~3.4cm 高台径 4.4~5.4cm

B 2類 (49~57) 口径 8.6~9.9cm 器高 2.8~3.4cm 高台径 約5.0cm

C類一体部が外上方に直線的に開き、そのまま口縁部にいたるもの。体部の立ち上がりからさらに、底部より急に立ち上がるもの (C 1類)、底部から斜め外上方に直線的に立ち上がるもの (C 2類) に細分される。

C 1類 (58~61) 口径 8.8~9.4cm 器高 約3.1cm 高台径 4.3~5.2cm

C 2類 (62~68) 口径 9.0~10.2cm 器高 約3.3cm 高台径 4.6~6.1cm

表7 丸山1号窯出土遺物 分類別個体数表

器種	碗			小碗(輪花小碗 含む)			計	
	A類	B類	C類	A類	B類	C類	碗	小碗
分類	8	10	5	15	19	11	23	45
個体数	35%	43%	22%	33%	42%	25%	34%	66%
構成率								

以上、小碗においても3つに分類した。これを分類別に構成比で見るとA類は33%、B類は42%、C類は25%となりB類が小碗で半数近く構成となっている。小碗においても碗類と同様、B類はA類とC類の中間的形態となるが、同一型式として取り扱うことが可能なほどA・B類は型式的にも類似している。そのため、A類・B類の湾曲を指向したものは全体の75%となり碗と同じく圧倒的多数を占める。

遺物中で降灰が確認できるものは、器形が判明する資料68点のなかで75%を占める。碗・小碗・輸花小碗での降灰は78%・70%・100%と高い割合でみられる。降灰の範囲では輪花小碗が内面全体・体部外面に壁屑とともにみられるところから、輪花小碗は積み重ねて焼成する際、最上段に位置していたことを示している。小碗では降灰の範囲に種類が多く、底部を除く内面全体から高台外面まで降灰するもののがやや多い。碗では圧倒的に口縁部を含めた体部内・外面に降灰するものが多い。内面全体に降灰が確認できるものには壁屑も多く着附しておらず、これらは焼成する際に積み重ねの最上段に位置するもので降灰の範囲が狭くなる遺物ほど積み重ねの下位にあるものとみて差し支えなかろう。

碗・小碗において、色調に灰白色系、暗灰色系の2種が存在する。全体の形状が判明する資料のうち灰白色系、暗灰色系の両者の比率はほぼ4:6で暗灰色系の色調をもつものがやや多い。また、灰白色系のものは碗・小碗ともC類が極めて少ないが、暗灰色系のものはどの型式においてもみられる。なお、輪花小碗はすべて灰白色系を呈する。

表8 丸山1号窯出土遺物 降灰観察表

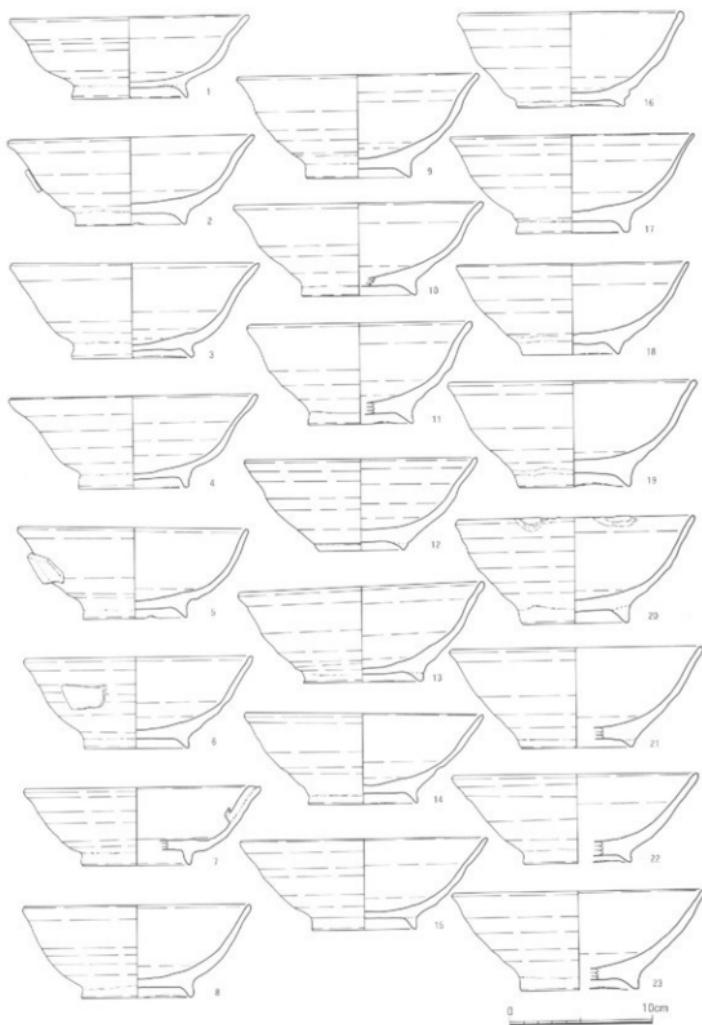
	降灰 有	降灰 無		計
碗	18	78%	5	22%
小 碗	28	70%	12	30%
輪花小碗	5	100%	—	—
計	51	75%	17	25%
				68

表9 丸山1号窯出土遺物 色調別分類表

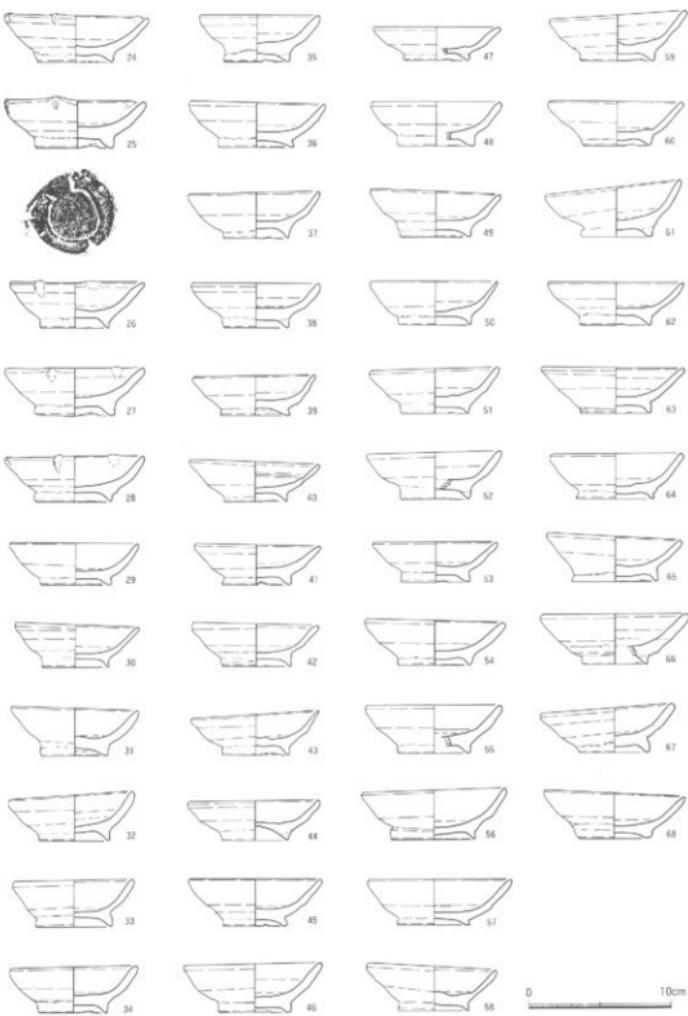
器種	碗							小碗(輪花小碗含む)								
	A類		B類		C類		計	A類		B類		C類		計		
灰白色系	3	37%	3	30%	—	—	6	26%	12	80%	9	47%	1	9%	22	49%
暗灰色系	5	63%	7	70%	5	100%	17	74%	3	20%	10	53%	10	91%	23	51%

この色調差と降灰の関連であるが、輪花小碗はすべて灰白色系であり内面全体に降灰と壁屑が確認できること、数値には示さなかったが碗・小碗の灰白色系の色調をもつものは底部内面を除く体部内・外面に降灰が多く認められる傾向にあること、焼成不良なものは暗灰色系のものに限られ降灰が認められないことから、色調差においても積み重ねによる位置に起因しているものであると捉えられる。

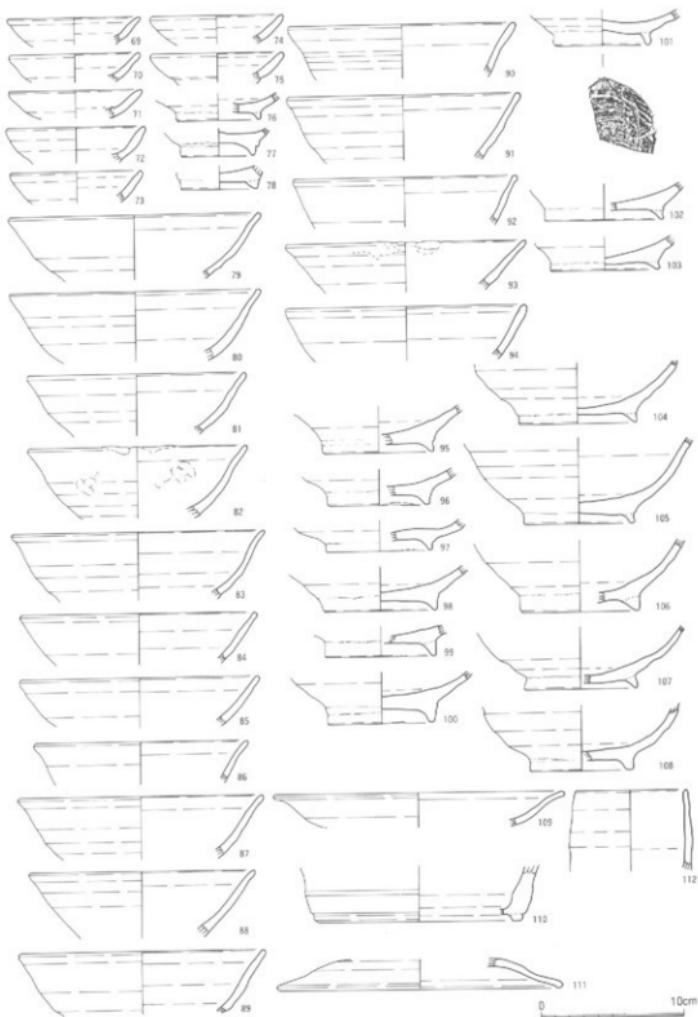
また、降灰・壁屑の着附が底部外面・体部外面のみみられるものは存在しないため、焼成前の製品を一種の窯道具的要素をもつものに転用させたものはないものとみられる。



第13図 丸山古窯跡出土遺物実測図(1)



第14図 丸山古窯跡出土遺物実測図(2)



第15図 丸山古窯跡出土遺物実測図(3)

表10 丸山古窯跡 出土遺物観察表

番号	種類	出土場所	寸法(体長)(cm)	形態の特徴		技術の特徴	新上・焼成・色調	備考
				外側	内側			
1	鰐	燒成窯床裏	口徑 (16.4) 深高 5.7 高台径 (S.0)	体部は凸曲して立ち上がり、口縫部は外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕をやや残す。口縫部の凹輪ナデ痕は特に強めで、底面に凹輪ナデ痕を残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
2	碗	燒成窯床裏	口徑 16.9 深高 6.2 高台径 7.8	体部は凸曲して立ち上がり、口縫部は外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
3	碗	燒成窯床裏	口徑 17.2 深高 6.6 高台径 6.6	体部は凸曲して立ち上がり、口縫部は外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に半円形凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
4	鰐	燒成窯床裏	口徑 17.1 深高 6.5 高台径 7.7	体部は凸曲して立ち上がり、口縫部は外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
5	碗	燒成窯床裏	口徑 15.9 深高 6.4 高台径 7.3	体部は凸曲して立ち上がり、口縫部は外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面下半に凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
6	碗	燒成窯床裏	口徑 15.8 深高 6.4 高台径 7.4	体部は凸曲して立ち上がり、口縫部は外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面下半に凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
7	碗	窯内裏上	口徑 16.4 深高 5.8 高台径 7.7	体部は凸曲して立ち上がり、口縫部は外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	スノコ底有り	
8	碗	燒成窯床裏	口徑 15.8 深高 6.5 高台径 7.9	体部は凸曲して立ち上がり、口縫部は外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面と内側に凹輪ナデ痕を残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
9	碗	燒成窯床裏	口徑 (16.0) 深高 7.2 高台径 (7.4)	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面と内側に凹輪ナデ痕を残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
10	碗	燒成窯床裏	口徑 (17.1) 深高 (6.8) 高台径 (8.1)	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面と内側に凹輪ナデ痕を残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
11	碗	燒成窯床裏	口徑 (15.0) 深高 7.1 高台径 (7.3)	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を明確に残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
12	碗	燒成窯床裏	口徑 16.0 深高 6.4 高台径 (5.8)	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕をやや強く残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転窯底鋼網	
13	碗	燒成窯床裏	口徑 17.0 深高 6.8 高台径 8.5	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を明確に残す。口縫部の凹輪ナデ痕はやや強く残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
14	碗	燒成窯床裏	口徑 16.5 深高 6.9 高台径 7.7	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面下半に凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
15	碗	裏探	口徑 (17.1) 深高 (6.4) 高台径 (7.3)	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	口縫部の凹輪ナデ痕はやや強く残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
16	碗	燒成窯床裏	口徑 16.9 深高 6.7 高台径 7.6	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面下半に凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
17	碗	燒成窯床裏	口徑 16.9 深高 6.9 高台径 8.0	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面下半に凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
18	碗	燒成窯床裏	口徑 15.2 深高 6.4 高台径 6.9	体部の表面は凹く、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕をやや残す。底面外周部に凹切痕を残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	スノコ底有り	
19	碗	前輪部灰層	口徑 (17.1) 深高 6.7 高台径 7.9	体部は直線的で中央にやや屈曲し、口縫部は丸く外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面下半に凹輪ナデ痕を明確に残す。口縫部の凹輪ナデ痕はやや強く残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	スノコ底有り	
20	碗	前輪部灰層	口徑 (16.4) 深高 7.4 高台径 7.6	体部は直線的で、口縫部は小さく外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を明確に残す。口縫部の凹輪ナデ痕はやや強く残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
21	碗	燒成窯床裏	口徑 (17.1) 深高 7.0 高台径 (7.9)	体部は直線的で、口縫部は小さく外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を明確に残す。口縫部の凹輪ナデ痕はやや強く残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
22	碗	燒成窯床裏	口徑 17.0 深高 6.3 高台径 7.7	体部は直線的で、口縫部は小さく外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を明確に残す。口縫部の凹輪ナデ痕はやや強く残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
23	碗	燒成窯床裏	口徑 (17.4) 深高 6.9 高台径 (8.4)	体部は直線的で、口縫部は小さく外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を明確に残す。口縫部の凹輪ナデ痕はやや強く残す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り	
24	輪花	燒成窯床裏 小柄	口徑 15.2 深高 3.3 高台径 5.3	体部はやや曲げし、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を指す。輪花は口縫部の凹輪ナデ痕を指す。また外周部にヘラ状工具で施す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り輪花 5弁	
25	輪花	前輪部灰層 小柄	口徑 9.7 深高 3.3 高台径 (5.8)	体部は直線的で、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を指す。輪花は口縫部の凹輪ナデ痕を指す。また外周部にヘラ状工具で施す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り輪花 5弁	
26	輪花	窯内裏上	口徑 9.2 深高 3.1 高台径 4.8	体部の表面は凹く、口縫部はやや外反する。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を指す。輪花は口縫部の凹輪ナデ痕を指す。また外周部にヘラ状工具で施す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	スノコ底有り輪花残存 2弁	
27	輪花	燒成窯床裏	口徑 9.5 深高 3.6 高台径 5.4	体部の表面は凹く、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を指す。輪花は口縫部の凹輪ナデ痕を指す。また外周部にヘラ状工具で施す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り輪花残存 1弁	
28	輪花	燒成窯床裏	口徑 9.5 深高 3.2 高台径 5.4	体部の表面は凹く、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫端部は丸く收める。	体部外面に凹輪ナデ痕を指す。輪花は口縫部の凹輪ナデ痕を指す。また外周部にヘラ状工具で施す。	新上 完好 焼成 良好 色調 暗灰白色	ロクロ右回転スノコ底有り輪花残存 3弁	

番号	部種	出土地点	計測値 (cm)	前 里 の 特 徴	技 佐 の 特 復	始土 壁成、色調	曲 異
29	小柄	成城東床裏 高台	8.8 2.9 4.5	体部は直角し、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	内外面とも丁寧な回転ナードを施す。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
30	小柄	鹿鳴東床裏 高台	8.4 2.6 4.7	体部は直角し、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	内外面とも丁寧な回転ナードを施す。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
31	小柄	鹿鳴東床裏 高台	8.8 2.9 4.8	体部は直角し、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	内外面とも丁寧な回転ナードを施す。内外面とも丁寧な回転ナードを施す。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
32	小柄	鹿鳴東床裏 高台	8.5 3.2 5.0	体部は直角し、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	内外面とも丁寧な回転ナードを施す。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
33	小柄	鹿鳴東床裏 高台	8.1 2.9 5.4	体部は直角し、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	内外面とも丁寧な回転ナードを施す。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
34	小柄	鹿鳴東床裏 高台	8.8 2.9 4.5	体部は直角し、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部外側下に丁寧な回転ナードを施す。内面中央の本縫部部分が粗雑に施る。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
35	小柄	新庭院灰屋 高台	8.2 3.3 4.6	体部は直角し、口縫部は丸く收める。	口縫部前面・内側全体に回転ナードを施す。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
36	小柄	便成東床裏 高台	9.3 3.1 5.3	体部は直角し、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部外手下に丁寧な回転ナードを施す。内面底・体部の度に回転ナードによる接合有り。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
37	小柄	鹿鳴裏土 高台	9.1 3.2 4.6	体部は直角し、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	口縫部前面・内側全体に回転ナードを施す。内面中央の本縫部部分が粗雑に施る。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
38	小柄	利庭灰屋 高台	8.8 3.1 4.6	体部は直角し、口縫部はそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部外手下に丁寧な回転ナードを施す。内面底・体部の度に回転ナードによる接合有り。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
39	小柄	鹿鳴裏土 高台	8.5 2.8 4.4	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	口縫部の回転ナードはやや強く施す。底部内面中央の本縫部部分が突起状に残る。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
40	小柄	鹿鳴裏土 高台	8.9 3.2 4.4	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	体部前面に回転ナードをして立ち上がり。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
41	小柄	便成東床裏 高台	9.0 3.5 4.9	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	口縫部は丸く收める。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
42	小柄	鹿鳴裏土 高台	8.5 3.0 4.5	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	体部外手下に丁寧な回転ナード (?) を施す。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
43	小柄	新庭院灰屋 高台	8.9 3.2 4.7	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	口縫部の回転ナードはやや強く施す。底部内面中央の本縫部部分が突起状に残る。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
44	小柄	表揮 高台	9.1 2.8 4.7	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	口縫部の回転ナードはやや強く施す。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
45	小柄	鹿鳴裏土 高台	9.0 3.3 4.5	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	内面全体に口縫部外側に回転ナードを施す。口縫部に切欠き有る。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
46	小柄	鹿鳴裏土 高台	9.5 3.4 5.1	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	体部内面に口縫部外側に回転ナードを施す。底部内面中央の本縫部部分が突起状に残る。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
47	小柄	前庭灰屋 高台	9.0 2.8 (4.6)	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	口縫部の回転ナードはやや強く施す。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
48	小柄	表揮 高台	8.9 3.1 5.4	体部手前で屈曲して立ち上がり。口縫部はわずかに外反する。口縫部は丸く收める。	口縫部の回転ナードはやや強く施す。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
49	小柄	鹿鳴裏土 高台	9.5 3.2 5.0	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
50	小柄	鹿鳴裏土 高台	8.8 3.1 4.5	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
51	小柄	前庭灰屋 高台	8.7 3.1 4.8	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
52	小柄	便成東床裏 高台	9.2 3.3 4.4	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
53	小柄	鹿鳴裏土 高台	8.6 2.8 4.8	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
54	小柄	鹿鳴裏土 高台	9.5 3.1 5.2	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
55	小柄	鹿鳴裏土 高台	(9.4) 3.4 (5.2)	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
56	小柄	表揮 高台	9.0 3.4 5.0	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
57	小柄	鹿鳴裏土 高台	9.8 3.2 5.1	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。	体部手前で屈曲し。口縫部をそのまま立ち上げる。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
58	小柄	前庭灰屋 高台	8.8 3.1 5.0	体部は直角で底部より少し立ち上がり。そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く收める。	体部は直角で底部より少し立ち上がり。そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り
59	小柄	鹿鳴裏土 高台	9.4 3.2 5.2	体部は直角で底部より少し立ち上がり。そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く收める。	体部は直角で底部より少し立ち上がり。そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く收める。高台の接合は粗雑。	始土 壁成 底成 底成 底成	クロ右回転 スノコ底有り

番号	西種	出土地点	計測値 (cm)	生 動 の 特 徴	枝 叶 の 特 徴	植 土、底土、色調	備 考
60	小柄	施成底床直	口徑 9.2 残存高 3.1 高台径 5.3	体部は直線的で底部より急に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	口縫部の回転ナブはやや強く膨らむ。底部の接合は粗雑。(?) あり。高台の接合は粗雑。	動土 密 焼成 及好 色調 白色	ロクロ右回転 スノコ盛有り
61	小柄	施成底床直	口徑 9.3 残存高 3.5 高台径 4.9	体部は直線的で底部より急に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	口縫部の回転ナブはやや強く膨らむ。高台の接合は粗雑。	動土 密 焼成 及好 色調 白色	ロクロ右回転 スノコ盛有り
62	小柄	窓内埋土	口徑 (9.4) 残存高 3.2 高台径 (5.0)	体部は直線的で底部より斜め外上方に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	口縫部の回転ナブはやや強く膨らむ。底部の接合は粗雑。(?) あり。高台の接合は粗雑。	動土 密 焼成 及好 色調 白色	スノコ盛有り
63	小柄	前庭部灰層	口徑 9.8 残存高 3.2 高台径 5.0	体部は直線的で底部より斜め外上方に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	口縫部の回転ナブはやや強く膨らむ。底部の接合は粗雑。(?) あり。高台の接合は粗雑。	動土 密 焼成 及好 色調 白色	ロクロ右回転 スノコ盛有り 内面一焼灰色
64	小柄	施成底床直	口徑 9.0 残存高 3.2 高台径 5.5	体部は直線的で底部より斜め外上方に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	口縫部の回転ナブはやや強く膨らむ。底部の接合は粗雑。(?) あり。高台の接合は粗雑。	動土 密 焼成 及好 色調 白色	ロクロ右回転 スノコ盛有り
65	小柄	施成底床直	口徑 9.3 残存高 3.2 高台径 6.1	体部は直線的で底部より斜め外上方に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	体・口縫部の回転ナブはやや強く膨らむ。高台の接合は粗雑。	動土 密 焼成 及好 色調 白色	ロクロ右回転 スノコ盛有り
66	小柄	前庭部灰層	口徑 10.2 残存高 3.5 高台径 4.6	体部は直線的で底部より斜め外上方に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	口縫部の回転ナブはやや強く膨らむ。底部の接合は粗雑。(?) あり。高台の接合は粗雑。	動土 密 焼成 及好 色調 白色	スノコ盛有り
67	小柄	前庭部灰層	口徑 9.1 残存高 3.1 高台径 5.0	体部は直線的で底部より斜め外上方に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	口縫部の回転ナブはやや強く膨らむ。底部の接合は粗雑。(?) あり。高台の接合は粗雑。	動土 密 焼成 及好 色調 白色	ロクロ右回転 スノコ盛有り
68	小柄	焼成底床直	口徑 9.7 残存高 3.2 高台径 —	体部は直線的で底部より斜め外上方に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	口縫部の回転ナブはやや強く膨らむ。底部の接合は粗雑。(?) あり。高台の接合は粗雑。	動土 密 焼成 及好 色調 白色	ロクロ右回転 スノコ盛有り
69	小柄	(窓内床直)	口徑 (9.2) 残存高 1.9 高台径 —	体部は直線的で底部より斜め外上方に立ち上がり、そのまま口縫部に到る。口縫部は丸く収める。	口縫部はややすかに外反し、口縫部は丸く収める。	70・71・72・74は口縫部の回転ナブをやや強く施す。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
70	小柄	(焼成底床直)	口徑 (9.0) 残存高 2.0 高台径 —	体部中位で弱く屈曲して立ち上がり、口縫部は丸く収める。	口縫部はややすかに外反し、口縫部は丸く収める。	73は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
71	小柄	(窓内埋土)	口徑 (9.2) 残存高 1.9 高台径 —	体部中位で弱く屈曲して立ち上がり、口縫部は丸く収める。	口縫部はややすかに外反し、口縫部は丸く収める。	73は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
72	小柄	(焼成底床直)	口徑 (9.6) 残存高 2.5 高台径 —	体部中位で弱く屈曲して立ち上がり、口縫部は丸く収める。	口縫部はややすかに外反し、口縫部は丸く収める。	73は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
73	小柄	(焼成底床直)	口徑 (9.1) 残存高 2.2 高台径 —	口縫部はややすかに丸ま立ち上がり、口縫部は丸く収める。	口縫部はややすかに丸ま立ち上がり、口縫部は丸く収める。	73は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
74	小柄	(窓内埋土)	口徑 (9.0) 残存高 2.1 高台径 —	体部中位で弱く屈曲して立ち上がり、口縫部は丸く収める。	口縫部はややすかに丸ま立ち上がり、口縫部は丸く収める。	73は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
75	小柄	(前庭部灰層)	口徑 (9.0) 残存高 2.2 高台径 —	体部中位で弱く屈曲して立ち上がり、口縫部は丸く収める。	口縫部はややすかに丸ま立ち上がり、口縫部は丸く収める。	73は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
76	小柄	前庭部灰層	口徑 1.9 残存高 (5.9) 高台径 —	76~78の高台は外側がほぼ直立し、内面は外傾する。	76~78の高台は外側がほぼ直立し、内面は外傾する。	77は底部内面中央の末側脇部分が突起状に残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
77	小柄	前庭部灰層	口徑 — 残存高 2.0 高台径 5.2	76~78の高台は外側がほぼ直立し、内面は外傾する。	76~78の高台は外側がほぼ直立し、内面は外傾する。	77は底部内面中央の末側脇部分が突起状に残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
78	小柄	前庭部灰層	口徑 1.7 残存高 5.4 高台径 —	76~78の高台は外側がほぼ直立し、内面は外傾する。	76~78の高台は外側がほぼ直立し、内面は外傾する。	77は底部内面中央の末側脇部分が突起状に残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
79	碗	(焼成底床直)	口徑 (17.2) 残存高 4.5 高台径 —	79~83は口縫部が外反気味にひび、口縫部を丸く収める。	79~83は口縫部が外反気味にひび、口縫部を丸く収める。	79~83は体・口縫部の回転ナブ直がやや残る。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
80	碗	(表模)	口徑 (17.4) 残存高 4.9 高台径 —	80は口縫部をややつまみ上げる。	80は口縫部をややつまみ上げる。	79~83の口縫部はやや丸く曲げて丸く収める。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
81	碗	(焼成底床直)	口徑 (15.1) 残存高 4.3 高台径 —	80は口縫部をややつまみ上げる。	80は口縫部をややつまみ上げる。	80は口縫部をやや丸く曲げて丸く収める。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
82	碗	(焼成底床直)	口徑 (15.0) 残存高 4.7 高台径 —	80は口縫部をややつまみ上げる。	80は口縫部をややつまみ上げる。	80は口縫部をやや丸く曲げて丸く収める。	ロクロ右回転
83	碗	(焼成底床直)	口徑 (17.4) 残存高 4.8 高台径 —	80は口縫部をややつまみ上げる。	80は口縫部をややつまみ上げる。	80は口縫部をやや丸く曲げて丸く収める。	ロクロ右回転
84	碗	(焼成底床直)	口徑 (16.2) 残存高 5.6 高台径 —	84~90は口縫部が弱く外反し、口縫部を丸く収める。	84~90は口縫部が弱く外反し、口縫部を丸く収める。	84~90は口縫部ナブ底を残し、87~89の口縫部はやや丸く曲げて丸く収める。	動土 密 焼成 及好 色調 白色
85	碗	(表模)	口徑 (16.4) 残存高 3.5 高台径 —	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	88は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	ロクロ右回転 スノコ盛有り
86	碗	(前庭部灰層)	口徑 (14.8) 残存高 2.9 高台径 —	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	88は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	ロクロ右回転 スノコ盛有り
87	碗	(焼成底床直)	口徑 (16.8) 残存高 4.4 高台径 —	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	88は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	ロクロ右回転 スノコ盛有り
88	碗	(焼成底床直)	口徑 (15.5) 残存高 4.7 高台径 —	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	88は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	ロクロ右回転 スノコ盛有り
89	碗	(窓内埋土)	口徑 (16.8) 残存高 4.4 高台径 —	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	88は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	ロクロ右回転 スノコ盛有り
90	碗	(焼成底床直)	口徑 (17.8) 残存高 3.8 高台径 —	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	口縫部は84がややつまみ上げ、90が厚手にしており88は直線的に近い部の刑制となる。	88は体部内面の回転ナブ直がやや明瞭に残る。	ロクロ右回転 スノコ盛有り

番号	器種	出土地点	計測値(cm)	形態の特徴		技法の特徴		釉土・施色・色調	備考
				高台	底盤	高台	底盤		
91	瓶	(鹿鳴堂深窓)	口径 残存高 高台径	4.7 4.7 —	91～93は口縁部を外反させずに、底部から口縁部をそのまま立ち上げ、口縁部を丸く收める。	91～93は体部の回転ナデ痕をやや明確に残す。	釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色		
92	瓶	(鹿鳴堂深窓)	口径 残存高 高台径	(15.4) 3.5 —		91～93は口縁下部をやや強く回転ナデ痕を施している。		釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	ロクロ右回転
93	瓶	(鹿鳴堂深窓)	口径 残存高 高台径	(16.7) 3.5 —		93は口縁部を外側から挿入し内面を指掌でたて、補強した痕跡がみとめられる。		釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	ロクロ右回転
94	瓶	(鹿鳴堂深窓)	口径 残存高 高台径	(16.7) 3.5 —				釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	ロクロ右回転
95	瓶	施成窓底直	口径 残存高 高台径	— 3.3 7.8	95～96は高台がつぶれるものも含まれるが概ね外舟が底立し内舟が外傾する。	高台と底盤の接合は粗雑で接合痕を明瞭に残す。		釉土 磨 焼成 不良 色調 黄白色	ロクロ右回転
96	瓶	窓内埋土	口径 残存高 高台径	— 2.6 (7.2)		底盤外表面は底部外縁が高台接合時のナデにより消される中中央部は糸切り痕がうすく残す。		釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	スノコ底有り
97	瓶	施成窓底直	口径 残存高 高台径	— 2.1 (7.4)				釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	スノコ底有り
98	瓶	施成窓底直	口径 残存高 高台径	— 3.1 7.9				釉土 磨 焼成 不良 色調 黄白色	
99	瓶	病底頭灰層	口径 残存高 高台径	— 2.1 (7.8)	100～101は高台がつぶれるものも含まれるが概ね内・外舟とも底立している。	高台と底盤の接合は粗雑で接合痕を明瞭に残す。		釉土 磨 焼成 不良 色調 黄白色	
100	瓶	施成窓底直	口径 残存高 高台径	— 3.6 (7.5)	101は底盤中央に糸切り痕を明瞭にし、高台は糸切り未調整の底盤に直接接する。	101は底盤中央に糸切り痕を明瞭にし、高台は糸切り未調整の底盤に直接接する。	釉土 磨 焼成 良好 色調 黄白色	ロクロ右回転 スノコ底有り	
101	瓶	表採	口径 残存高 高台径	— 2.5 (6.8)				釉土 磨 焼成 良好 色調 黄白色	
102	瓶	施成窓底直	口径 残存高 高台径	— 2.6 (8.4)	高台が上から加圧によりつぶされており底盤隆起が外にはみ出す、内外舟とも外傾する。	高台と底盤の接合は粗雑で接合痕を明瞭に残す。		釉土 磨 焼成 不良 色調 淡灰色	ロクロ右回転
103	瓶	前庭部灰層	口径 残存高 高台径	— 2.4 (7.7)		底盤外表面は底盤外縁が高台接合時のナデにより消される中中央部は糸切り痕がうすく残す。		釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	
104	瓶	施成窓底直	口径 残存高 高台径	— 4.3 8.3	104～106の体部は、やや高台気様に立ち上がる。	体部外表面に回転ナデ痕をやや残す。		釉土 磨 焼成 良好 色調 黄白色	
105	瓶	前庭部灰層	口径 残存高 高台径	— 5.9 (3.9)	高台は内外舟とも外傾する。	高台と底盤の接合は粗雑で接合痕を明瞭に残す。		釉土 磨 焼成 良好 色調 黄白色	
106	瓶	施成窓底直	口径 残存高 高台径	— 5.1 (8.4)		底盤外表面は底盤外縁が高台接合時のナデにより消される中中央部は糸切り痕がうすく残す。		釉土 磨 焼成 不良 色調 黄白色	ロクロ右回転
107	瓶	窓内埋土	口径 残存高 高台径	— 4.3 (8.0)	107・108は体動下平でやや曲面する。	体部外表面に回転ナデ痕を残す。		釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	ロクロ右回転
108	瓶	前庭部灰層	口径 残存高 高台径	— 4.5 (7.2)	107の高台は内外舟とも外傾し、108は高台部分が強めに外傾しているが内舟は外傾し外舟は直立する。	高台と底盤の接合は粗雑で接合痕を明瞭に残す。		釉土 彩粒多く含む 焼成 良好 色調 淡灰色	ロクロ右回転
109	大形瓶	(病底頭灰層)	口径 残存高	(20.1) 2.4	110瓶はやや外反し、底部は肥厚する。	110瓶は回転ナデ痕は明瞭に残り、底部は特に強く施す。		釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	ロクロ右回転
110	倒壊瓶	表採	口径 残存高	3.9 (13.8)	底盤と体部の境界は凹面して明瞭である。高台は底盤外縁に外傾した長い長方形を描するものがつく。体剣は外上方にのび底部は比較的うすい。	高台は貼付け高台である。		釉土 磨 焼成 良好 色調 黑灰色	台付蓋か?
111	倒壊瓶	(表採)	口径 残存高	(19.4) 2.1	天井部と口縁部の裏返は長い段をなし、口縁部内面は下方に肥厚して腰をなす。	内外面とも回転ナデ痕を残すが欠け、口縁部外縁部に施すのが強く、また、口縫部内面も回転ナデ痕は強く施す。		釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	ロクロ右回転
112	倒壊瓶	(表採)	口径 残存高	(7.7) 5.7	口縁部は直線的でわざかに外傾する。	内外面とも回転ナデ痕を施す。		釉土 磨 焼成 良好 色調 淡灰色	直口蓋か?

第3節 遺物出土状況

遺物は丸山1号窯では窯内埋土・燃焼室・焼成室床面直上、前庭部灰層上面より出土しており、周辺の表土からも遺物が出土している。

燃焼室・焼成室床面直上の遺物は、基本的には丸山1号窯の最終操業時のものとみられる。また、前庭部に堆積した灰層中より出土した遺物も、灰層が間層をはさまない単一層であり、遺物も灰層の上面より出土するものが中心である。

表11 丸山1号窯出土遺物 出土地点表

器種	出土地点	窯内床面直上				窯内埋土		前庭部灰層		表 採		計	
		燃焼室		焼成室									
碗	6	13%	23	48%	3	6%	12	25%	4	8%	48	48%	
小 碗	9	19%	13	28%	6	13%	14	30%	5	10%	47	47%	
輪花小碗	3	60%	—	—	1	20%	1	20%	—	—	5	5%	
計	18	18%	36	36%	10	10%	27	27%	9	9%	100	100%	

*底部1/2以上を計測。出土地点は底盤片による。

(1) 窯体

窯内よりは、床面上から碗・小碗・輪花小碗が出土している。総点数に対する窯内床面直上遺物の割合は54%となる。出土箇所をみると碗・小碗とも焼成室で多く出土している。碗類の焼成室から出土する割合は48%とほぼ半数を占めており、小碗は焼成室からの割合は28%である。輪花小碗は焼成室からは出土していない。総点数に対する焼成室内での出土する割合は36%となり、焼成室内での碗・小碗の構成率は64%・36%となる。焼成室内では碗・小碗の分類において、出土量の多少に関わらず全ての分類した形態が揃っている。

燃焼室床面直上からも遺物が出土しているが、点数は18点とやや少なく総点数に対しても18%を占めるに過ぎない。ここでは輪花小碗が出土しており輪花小碗・小碗を合わせると燃焼室内での出土遺物の67%を占めており、碗を圧倒していることが注目される。

窯内での器種分類別の構成比と、全体での器種分類別構成比がほぼ近似する数値となるため、出土遺物の総体的構成を反映して窯内からは出土しているといえる。

窯内埋土からの遺物は点数が少ないため細かな分析には到らないが、碗・小碗・輪花小碗それぞれ出土しており、なかでも小碗がやや多く出土している。

(2) 前庭部

前庭部においては、堆積した灰層の上面より遺物が集中して出土しており、出土量は総点数に対して27%と窯内に次いで多い。器種としては碗・小碗・輪花小碗が出土しており点数は27点、その内訳は碗が44%、小碗が52%、輪花小碗が4%となる。灰層出土遺物は出土量としては多いが、形態の全容が判明できる資料はかなり限定される。そのため前節での分類をもとにした資料分析には耐えられないが概観すると、小碗はA～C類とも揃い、また、確定的ではないが焼成室では碗を中心に出土しているが前庭部になるとやや減少しており、焼成室・燃焼室・前庭部に向かうにしたがい出土の中心は小碗に移行していくことが窺える。

(3) その他

その他の遺物としては、丸山1号窯周辺のトレンチより出土しているものがある。周辺のトレンチでは窯の操業に関連する遺構はみられず、遺物はすべて表土中より出土している。遺構に伴う遺物ではないため灰層の末端に位置した遺物が移動したものとみられる。

表12 丸山1号窯出土遺物 分類別出土地点表

器種 △ 出土地点	碗							小碗(輪花小碗含む)							
	A類		B類		C類		計	A類		B類		C類		計	
燃焼室	2	40%	2	40%	1	20%	5	22%	8	62%	5	38%	—	—	13 29%
焼成室	5	36%	7	50%	2	14%	14	61%	2	16%	5	42%	5	42%	12 27%
窯内埋土	1	100%	—	—	—	—	1	4%	2	29%	3	42%	2	29%	7 16%
前庭部灰層	—	—	—	—	2	100%	2	9%	3	30%	3	30%	4	40%	10 22%
表 採	—	—	1	100%	—	—	1	4%	—	—	3	100%	—	—	3 6%

※出土地点は底部片による

第IV章 まとめ

今回の調査では、「山茶碗」焼成窯1基とこれに伴う前庭部の他、炭窯1基と前庭部・土坑を検出し、遺物も多数出土した。特に遺構では「山茶碗」焼成窯が大井川右岸地域で確認され、分焰柱等窯体が比較的良好に遺存していたこと、遺物では碗・小碗を中心に焼成していることなどが注目される。検出された炭窯は別の機会に論ずることとして、以下丸山1号窯についてのまとめと位置付けについて記していく。

1 丸山1号窯 窯体・前庭部

丸山1号窯は、比較的良好に遺存しており分焰柱も大きく破壊されることなく検出された。窯体の平面プランは短冊状であり、分焰柱は地山を掘り残していたものではなく、樹種は不明であるが木材を芯として周囲に粘質土を貼り付け構築していたことが明らかになった。また、窯体の断ち割り調査の結果では床面は1面のみであり床面・側壁を修復した痕跡は全く認められなかった。床・壁ともに掘り込んだ地表面をそのまま利用しているが、焼成室の床面は傾斜角度が増加するに従い凹凸が激しくなっていき、床面を平坦に調整したり、貼床の痕跡は認められない。このままでは製品の焼成は不可能であり製品を安定させるために焼台等を用いたであろうが、今回の調査では焼台は出土せずその痕跡すら確認できなかった。また、遺物の落灰・壁屑の有無から検証した結果、焼成前の製品を窯道具的要素をもつものに転用したものはみられない。床面の凹凸の状況をみれば製品を直接、床面上に置いて焼成したとは思われず、しかも焼台が今回の調査では出土していないことから考えると、焼台は間違なく使用したであろうが、その設置・形状は非常に簡便なものであって、焼成後に剥がされたものと推測される。

前庭部は西半のみ検出されたが、前庭部を設けるにあたり窯体を掘り込んだ際の排水を利用せず、地山を掘削して作り出していたことが明らかとなった。前庭部には、30cmほど灰が堆積しており間層をはさまない單一層であり、遺物はこの灰層の上面を中心出土した。

以上から、丸山1号窯は短期間の操業であり、操業回数も少なかったと考えられる。

2 丸山1号窯 出土遺物

第III章第2節で出土遺物の分類、第3節においては遺物の出土状況について記述してきた。ここでは遺物について総括的に記述していきたいが、窯体の調査がなされても「山茶碗」を生産する際に一連の工程において切り離して考えることはできない灰原を今回の調査では行い得ず、詳細な分析に耐えられるほど出土量はさして多くはないため、遺物についての記述は全体的に躊躇せざるを得ない。

灰原での出土遺物の器種構成を充分把握しきれていない現状においては明確な見解を得られないが、丸山1号窯は器種構成上から見て「山茶碗」の碗・小碗を主体に焼成した窯跡と思われる。

出土遺物は碗・小碗が中心であり、その構成比はほぼ1:1である。碗・小碗をそれぞれ3つに分類したが胎土・焼成・技法上において差異は認められない。碗においてはA類とB類、小碗ではA類とB類の体部にやや差異が認められるが、体部の湾曲を指向する方向性は共通しており、A類とB類は同一型式の範囲内に収めることも可能である。しかしながらここでは別型式として扱った。碗・小碗のA・B類とC類は形態が若干異なるが、出土状況からは併行関係にあると思われる。しかし、今回は灰原の調査を行っていないため丸山1号窯出土遺物の変遷を検証するだけの層位的資料を得ていない。

遺物は窯内床面直上、前庭部灰層上面を中心出土している。窯内の遺物は焼成時の位置を移動して

いるが床面から遊離して出土するものは少なく、多くは床面の直上より出土しており、窯出しの際の遊離した状態で出土している。前庭部からは灰層の上面より出土するものが殆どであり下面・床面直上より出土した遺物はない。この前庭部における出土状況と埋土の状況を考慮すると窯出しの際、燃焼室の灰等を前庭部に撒き出し、不良製品をこの上に廃棄した状況にあると思われる。

このように、出土状況と型式分類から層位的検証を補う必要がある。灰原は島田市教育委員会により調査がなされすでに消滅しているが、今回の調査において前庭部に堆積した灰層は、その上を流入土が覆っている間層をはさまない單一層で、遺物も上面を中心にして出土しないため、この灰層は丸山1号窯の最終操業時のものであることに問題はない。これにより、灰層は灰原最上層でもあり、そこでの出土遺物は丸山1号窯操業期間中の最も新しい遺物である。窯内床面直上と前庭部出土の遺物群との関連であるが、前庭部出土の遺物群が最終操業時に伴うことは前記したように確実であるが、そこでの碗・小碗の型式は窯内床面直上遺物と差異は認められない。碗は前庭部では出土量がやや少ないが窯内出土遺物と同型式であり、小碗は窯内・前庭部から安定して出土しているが、出土地点による差異は存在しない。窯内床面直上の遺物群は碗・小碗とも分類した3類が揃って出土し、出土状況から共伴する可能性は高いが、それと前庭部出土の遺物群は同一型式で一致することから、丸山1号窯出土遺物は基本的には窯内床面直上・前庭部の遺物群とも最終操業時の一括性を有し、時期差を考慮する必要はないものとみて差し支えなかろう。この場合、丸山1号窯出土遺物が一括性を有していることから、工人差を判別し、窯業生産の経営単位が明らかになる可能性がある。

3 丸山1号窯の編年的位置付け

丸山1号窯出土遺物は巨視的にみれば東遠江系に属する「山茶碗」である。丸山1号窯の周辺の古窯跡をみると北に灰釉陶器から連続して操業され当該地域最大の古窯跡群である旗指古窯跡群、北西には金谷町横岡周辺のすやん沢・ほろん沢・きつね沢等の古窯跡群を含めた地域を仮称して金谷古窯跡群、南西には灰釉陶器の段階から生産が行われた皿山古窯跡群が位置しており、このほかにも小規模の古窯跡が点在している。

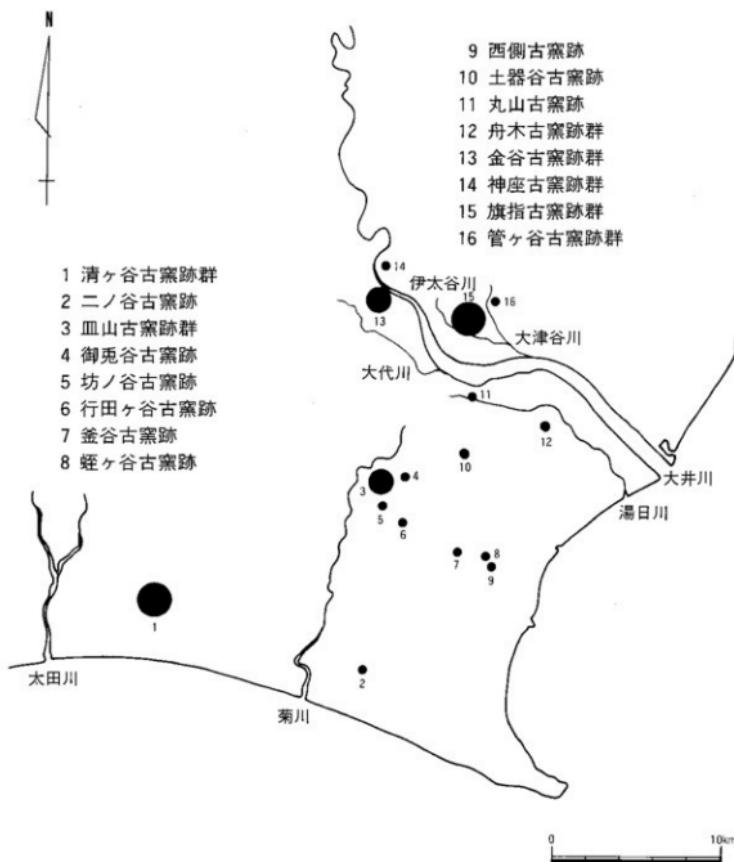
旗指古窯跡群は灰釉陶器の段階から生産が行われ、「山茶碗」の段階に到ると徐々に生産を縮小させていき、それと呼応するように金谷古窯跡群の生産が活発化していく状況が窺える。皿山古窯跡群は旗指古窯跡群の系譜上にあると考えられており、また旗指古窯跡群は発掘調査がすんでおり論考も優れたものが多いため旗指古窯跡群の資料と対比させながら論を進めていく³³。

丸山1号窯出土遺物の形態は、碗・小碗で体部が内済気味に立ち上がり口縁部が弱く外反するものが中心となり、体部が直線化を示すものも若干含まれている。これらは、旗指古窯跡群での分類に当てはめると(I-A-b型式)、(II-A-b型式)に該当すると思われる³⁴。また、器高にやや高低差がみられるが口径・高台径がほぼ画一化の方向を辿っている。旗指古窯跡群での編年案によると旗指2号窯以降、(I-A-b型式)への器形の画一化がみられ、続く旗指21号窯でもそれは引き継がれて形態的にも灰釉陶器の系譜を残しており、(I-A-b型式)が中心となりながらも(II-A-b型式)もみられる。この旗指21号窯と丸山1号窯とを対比してみると、旗指21号窯は丸山1号窯のものよりも体部の内済・口縁部の外反が強く丸山1号窯よりも先行する型式であることは明らかであるが、旗指21号窯でみられた(I-A-b型式)、(II-A-b型式)が丸山1号窯でも認められ、丸山1号窯出土遺物で旗指分類の(I-A-b型式)に当たるものは、旗指21号窯の退化した型式として位置付けられるであろう³⁵。

皿山古窯跡より北西約8kmに位置する金谷古窯跡群は1988年に釜谷西古窯跡が調査され、灰釉陶器の段階から操業が開始されていたことが確認されたが³⁶、それが「山茶碗」へと連続して営まれたかどうかは不明である。金谷古窯跡群は調査例が少なく実態は不明な点が多いが、公表された資料をもとに優れ

た考査がなされているので、それを活用していく³⁸。

金谷古窯跡群での最も重要な遺物の1つに、金谷町五和村大字栗島白山神社の経塚より陶製經筒數本と和鏡1面、刀子2本、「山茶碗」数個体出土しており、鏡面に「保延丙辰正月十八日・・・・」と墨書銘があったことである。保延丙辰は保延二(1136)年であり、「山茶碗」は陶製經筒の蓋として使用されていた³⁹。この「山茶碗」の形態をみると碗は口径約15.8cm、器高約4.6cm、高台径約7.2cmであり、丸山1号窯出土遺物よりも口径・器高とも縮小化がすすみ高台がやや低くなる。また、破片ではあるが底部糸切り無高台の小皿が1点存在している。この「山茶碗」を実見する機会を得なかつたが、形態・調整・高台・乾燥法などにより、金谷古窯跡群中の釜谷(すやん沢)古窯跡の製品であることが從来より指摘されている⁴⁰。



第16図 灰釉陶器・「山茶碗」焼成窯跡分布図

釜谷古窯跡の「山茶碗」は、碗の口径16～17cm、器高5～6cm、高台径6～7.5cmで体部が湾曲するものと、直線的に立ち上がるものの2種があり口縁部を丸く収めている。無高台の小皿は口径7.5～8.5cm、器高1.8～2.8cm、底径3.4～4.2cmのものが、少ないながらも釜谷古窯跡の「山茶碗」として公表されている¹⁰。経塚出土の「山茶碗」より釜谷古窯跡の年代の一端が明らかにされたが、これをもって釜谷古窯跡の全てが12世紀第2四半期のものである、と云うわけではないであろうが、経塚出土の「山茶碗」にはこの型式における年代が自ずと明確になることに異論はないであろう。この白山経塚出土の「山茶碗」は体部が内湾しながらも口縁部は外反せず、旗指古窯跡群での分類（I-B-b型式）に当たると思われる¹¹。

この白山経塚と丸山1号窯の「山茶碗」を比較した場合、丸山1号窯の「山茶碗」にも体部が湾曲してそのまま口縁部に到る型式があるが出土遺物の主体とはならず、口縁部が弱く外反するものが中心であり、小碗の高台もしっかりとしていることからみても、丸山1号窯が白山経塚、すなわち釜谷古窯跡よりも先行する型式であると考えられる。

これらから、丸山1号窯は旗指21号窯と白山経塚（釜谷古窯跡）との間に位置付けられ、遺物の形態的変遷からも体部を湾曲・口縁部を外反するものから、体部の湾曲が弱まり口縁部が外反せず、小碗においては高台までも退化して底部糸切りの無高台になり碗においても高台が低くなっていくという型式的な流れのなかでは矛盾しないであろう。特に、丸山1号窯の碗の体部は湾曲を残すもの、又は弱いものと直線化の傾向を示すものが含まれ、それが一括して出土していることから、この位置付けに大過はないと思われる。どちらかといえば、器形的に旗指21号窯と類似性がみられるが体・口縁部の差異からは旗指21号窯から数型式において丸山1号窯が位置すると考えられる。旗指古窯跡群での編年案では旗指21号窯の次型式に旗指26号窯をおいており丸山1号窯との関連が注目されるが¹²、未公表であるため詳細は不明である。しかし、丸山1号窯が旗指21号窯に直接後続する型式ではなく、数型式おいた位置に認められるであろうことは現時点においては最も妥当なところであるが、この変遷にはなお議論の余地もあり、将来の調査による精緻な変遷に期待する所が大きい。

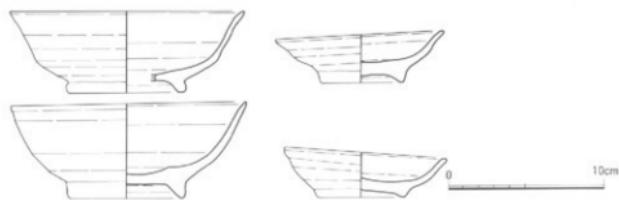
年代的根拠は持ち合わせておらず、白山経塚での実年代を信頼すれば12世紀前葉の時期が考えられるがなお慎重を期するものであり、積極的な年代決定を論ずるのは差し控えたい。

丸山1号窯が大井川右岸地域の湯日の地に開窯した原因は定かではないにしても、遺物の特徴から旗指古窯跡群との系譜が考えられる以上、その影響により成立したものとみられる。

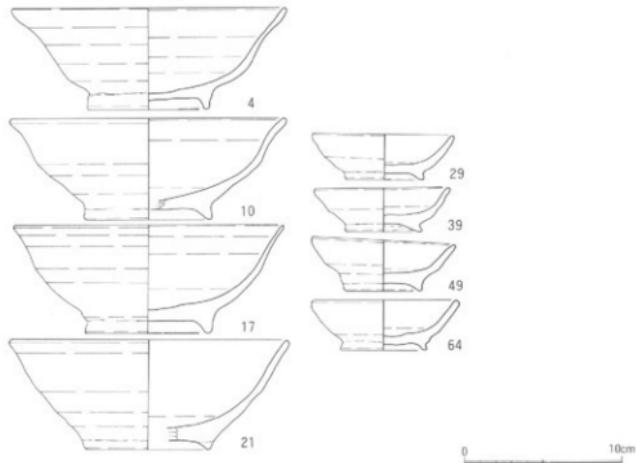
旗指古窯跡群が立地する地域が平安時代にどのような郷・莊に属していたかは不明であるが、12世紀初頭には“大津御厨”が成立し14世紀まで伊勢神宮の荘園として組み込まれる¹³。それ以降、旗指での窯業生産は衰退に向かい、かわって金谷町横岡の地域を中心とした金谷古窯跡群が台頭していくことは前記したが、金谷古窯跡群での資料は充分ではないにしても生産の中心は、現在において公表された資料をみると12世紀中葉以降とみられる。

この金谷町から島田市湯日地域を含む大井川右岸一帯は、大治三（1128）年に円勝寺の荘園として質借莊が成立していることは第1章第2節で記したが、丸山1号窯と金谷町横岡を中心とする地域の窯業生産の展開と少なからず関連があろう。

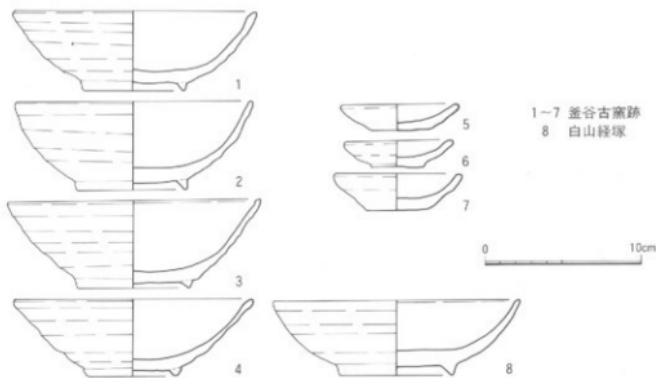
質借牧の内部構造が窺える資料は、大治四（1129）年三月の四至榜示注進状案¹⁴、立券文案¹⁵、在家目録案¹⁶がある。立券文案は質借牧全体の田・畠・原・山・野・河原の地目別面積と在家数を記載し、湯日郷についてはやや詳細に記されている。それによると、在家は37字7ヶ村、湯日郷の質借牧に対する割合は、田は31%、畠22%となる。また、治承二（1178）年質借御庄年貢物并所課等注文案¹⁷には質借郷に毎年八月二十二日の待賢門院御忌の御仏供一前・僧前十二前が、円勝寺正月修正料として質借郷に続松、湯日郷に菓子が課せられている。



第17図 旗指21号窯出土遺物実測図(註4b文献を再トレース)



第18図 丸山古窯跡出土遺物実測図



第19図 釜谷古窯跡・白山経塚出土遺物実測図(註4c・8a文献を再トレース)

このことは、治承二年の段階で質借郷に所在する横岡地域の窯業生産がすでに確立しており、同郷に課せられた正月修正料が続松であることは山林を多く含むことを示すものである。質借郷は地形的には大井川右岸の比較的安定した土地であるが、扇状地の河岸や平坦地を含むもの的小規模であり大半は山地が占めている。湯日郷は湯日川周辺を中心に田畠が經營されていたと思われるが、湯日郷の立券文案の記載が条里坪付に従った田の所在地を記していることから条里が施行されていたものとされており³¹⁹、質借・大楊郷よりも耕地環境は良好であったものと推定される。大楊郷は大井川下流域の平坦地に所在し、広大な田を有しており比較的の規模の大きな村を含んでいたが、治承二年質借御庄年貢物并所課等注文案には大楊郷は停廃状態となり年貢が半分となったように、大井川下流域であったゆえに耕地環境が不安定であったことが明らかである。

湯日郷に、田の所在地の記載から条里が施行されていたとするならば、この地域の開発が進行していたことを示すものである。また、大治四年三月の四至榜示注進状案、立券文案、在家目録案、治承二年質借御庄年貢物并所課等注文案から1在家あたりの田面積が湯日郷は1.7町あり、それは質借郷の2.4倍、大楊郷の1.7倍の面積を有しているとする見解がある³²⁰。さらに、湯日郷の正月修正料が菓子であったことを含めて考えると、湯日郷は質借郷の中でも比較的耕環境が良好であり、大治三年以降圓勝寺の莊園として成立してからの内部構造を知る上で示唆に富むものである。

大治三年以降、圓勝寺の莊園が成立したことは湯日地域を含む質借牧の政治的変換点であったと思われる。それと丸山1号窯との関連は不明瞭であることは否めないが、ここで思考を記すことが許されるならば、旗指古窯跡群の製品が駿河国内だけでなく国外でも出土するとされていることから³²¹、在地周辺に対する供給窯という役割に止まらず国内の需要に応え、国外でも商品として流通している性格が窺える。また、金谷町横岡は遠江国に属するが、金谷古窯跡群の製品が旗指古窯跡群と同様に在地周辺以外にも駿河・伊豆国で出土しているという指摘もあることから³²²旗指古窯跡群と類似する性格が考えられる。その際、2つの古窯跡群の現在における立地環境をみると、旗指古窯跡群の南には伊太谷川、東に大津谷川が流れ大井川に注ぎ、金谷町横岡地域では大代川がこれも大井川に合流している。製品を運搬する際に水運を利用する方が簡便であり窯の立地にも大きな関連があることは容易に推測されるが、ともに大井川の水運を利用してることから製品を運搬する輸送業者の役割を担った集団が大井川流域に存在し、重要な位置を占めていたとは想定できないであろうか。特に、旗指古窯跡群では製品輸送に水運を有効に活用していたことを示す例として、島田市・居倉遺跡がある。この遺跡は大津谷川の右岸に立地し、多量の灰釉陶器、墨書き土器のほか、木簡、題籠等一般的な集落と比べ質・量とも豊富な遺物が出土しており、旗指古窯跡群を背景とした製品の供給のための津的な性格をもつ遺跡と考えられている³²³。丸山1号窯では、湯日川が近隣に流れてはいるが大井川に注ぐものではなく直接駿河湾に至っている。当時の大井川は現在よりも水量は豊富で急流であったと推定され、そのため大井川に注ぐ中小河川に製品を集積し運搬したものと思われるが、伊太谷・大津谷・大代川の旧流路が現在の流路とは異なるとしても製品輸送の中心が大井川であったことは動かし難いであろう。製品の広域流通を考えた場合、大井川に注ぐ大代川が近隣に流れる金谷町横岡地域がより良好な環境にあったことは明らかであろう。また、今回の調査成果からは窯体の床・側壁の修復等はないため長期的営窯は認められず、基盤層の硬質により窯体掘削の困難さ等が指摘できる。

いささか拡大解釈ではあるが、丸山1号窯は大治三年の圓勝寺の莊園が成立したことによる政治的要因、製品の広域流通的見解からの立地環境の不便性、生産的環境の条件が満たされない等が要因となり、湯日の地での生産を放棄し、以後金谷町横岡の地で集中して生産がなされたものとみては考え過ぎであろうか。

窯業生産において流通・政治的背景を考慮にいれた研究視点が重要であることは言うまでもない。ま

た、丸山1号窯が立地する地域は質俗莊の莊域に含まれ、質俗莊はその成立・伝承・内部構造が把握できる資料が残されており、莊園研究史のなかでも注目される莊園である。今後、丸山1号窯の歴史的位置の解明や、旗指古窯跡群・金谷古窯跡群との関連も検討を要するであろう。質俗莊域での考古学的資料の蓄積を期待するとともに、質俗莊における考古・文献資料等を含めた総合的調査の実施は将来の課題である。

なお、調査から本書の作成にあたって、下記の方々より有益な御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。(五十音順、敬称略)

坂巻隆一 篠原修二 篠ヶ谷路人 嶋野雄康 清水尚 鈴木一行 松井一明

註

- 1 「山茶碗」の用語には、狭義の概念として碗形態のみを指すものと、広義の概念として狭義の「山茶碗」と併焼される他機種を含む總体として指したもの2種が存在する。このため「山茶碗」といった用語も発生し、「山茶碗」自体の用語は極めて便宜的であり曖昧さを多分に内在させている。そこで、「山茶碗」の語を用い「灰釉系陶器」と呼称する見解もある。しかし、「灰釉系陶器」の概念もそれを用いる論者により多様な使用がなされており、概念規定としてはなお整理・検討の余地が残されているように思われる。本書では、「灰釉系陶器」の用語を支持するものであるが、現在までのところ著者自身、この用語の定義を明確にし得ないため、これまでの学史を尊重して暫定的に「山茶碗」の用語を用いることとする。
- 2 質俗莊については、
 - a 「藤原永範寄進状案」『平安遺文』4692号
 - b 「静岡県史 通史編1 原始・古代』 静岡県 1994年
 - c 「遠江国質俗莊に関する二、三の問題」 原秀三郎『静岡県史研究 別刊号』 静岡県 1986年
 - d 「質俗莊から見た平安時代の静岡」 石上英一『静岡県史研究 第12号』 静岡県 1996年
 - e 『日本史小百科 莊園』 東京堂出版 1978年

を参考とした。

- 3 炭窯に関しては『川根町 遊炭の会』の方々より様々な御教示を得た。記して感謝の意を表します。
- 4 a 『旗指古窯跡群』 島田市教育委員会 1976年
- b 『旗指古窯跡発掘調査報告書』 島田市教育委員会 1983年
- c 『田ノ谷遺跡発掘調査報告書』 島田市教育委員会 1985年
- d 『居倉遺跡発掘調査報告書』 島田市教育委員会 1987年
- e 『旗指古窯陶器生産の年代について』 渋谷昌彦『静岡県考古学研究 13』 静岡県考古学会 1982年
- f 「旗指窯の灰釉陶器とその年代」 渋谷昌彦『灰釉陶器の時代とその流通』 静岡県考古学会 1986年
- 5 前掲註4 b 文献
- 6 旗指古窯跡群の資料は、島田市教育委員会の格別の御配慮により実見する機会を得た。記して感謝の意を表します。

- 7 『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会 1989年
- 8 前掲註 4 c 文獻
a 「駿河山 2号墳発掘調査報告書」 金谷町教育委員会 1983年
- b 「釜ヶ谷窯の生産」 坂巻隆一 『灰釉陶器の時代とその流通』 静岡県考古学会 1986年
- c 「遠江における山茶碗生産について」 松井一明 『静岡県考古学研究 25』 静岡県考古学会 1993年
- 9 a 「経塚と供養塔と塔の心礎」 足立鉄太郎 『静岡県史跡名勝天然記念物調査報告 第6集』 1930年
b 「経塚」 石田茂作 『静岡県史 第3卷』 静岡県 1936年
c 「経塚遺物」 平野吾郎 『静岡県史 資料編3 考古三』 静岡県 1992年
- 10 前掲註 4 c 文獻
- 11 前掲註 8 a 文獻
- 12 前掲註 4 b 文獻
- 13 前掲註 4 d + 4 f 文獻
- 14 前掲註 4 b 文獻
『島田市史 上巻』 島田市 1978年
- 15 「遠江国質借牧四至注進状案」 『平安遺文』 4882号
- 16 「遠江国質借莊立券文案」 『平安遺文』 2129号
- 17 「遠江国質借牧在家帳案」 『平安遺文』 4981号
- 18 「遠江国質借牧年貢物等注文案」 『平安遺文』 3827号
- 19 前掲註 2 b 文獻
- 20 前掲註 2 b 文獻
- 21 前掲註 4 c 文獻
「流通の問題について」 渋谷昌彦 『灰釉陶器の時代とその流通』 静岡県考古学会 1986年
- 22 前掲註 8 c 文獻
- 23 前掲註 4 d 文獻

図 版



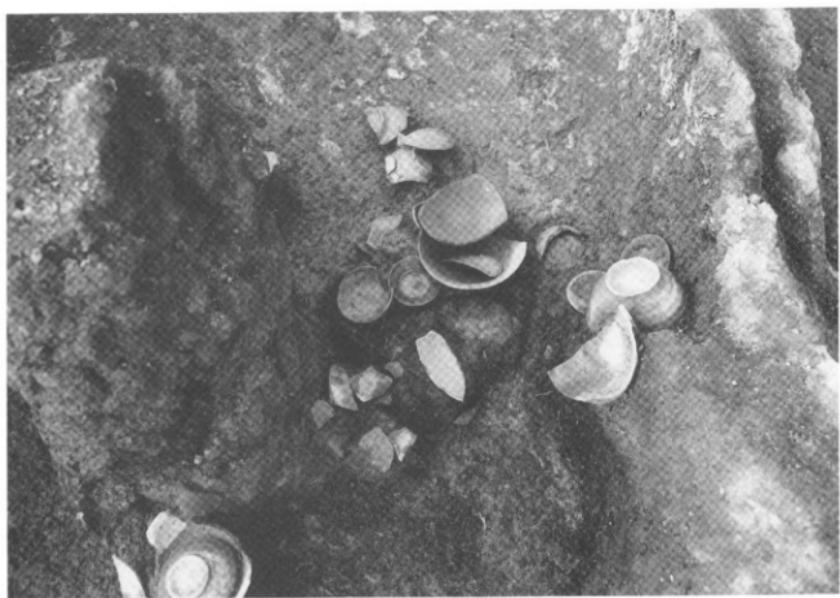
1 調査地遠景



2 調査前全景



丸山1号窯 遺物出土状況



1 分焰柱 右側付近 遺物出土状況



2 分焰柱 左側付近 遺物出土状況

圖版4 丸山1號窯



丸山1號窯 全景

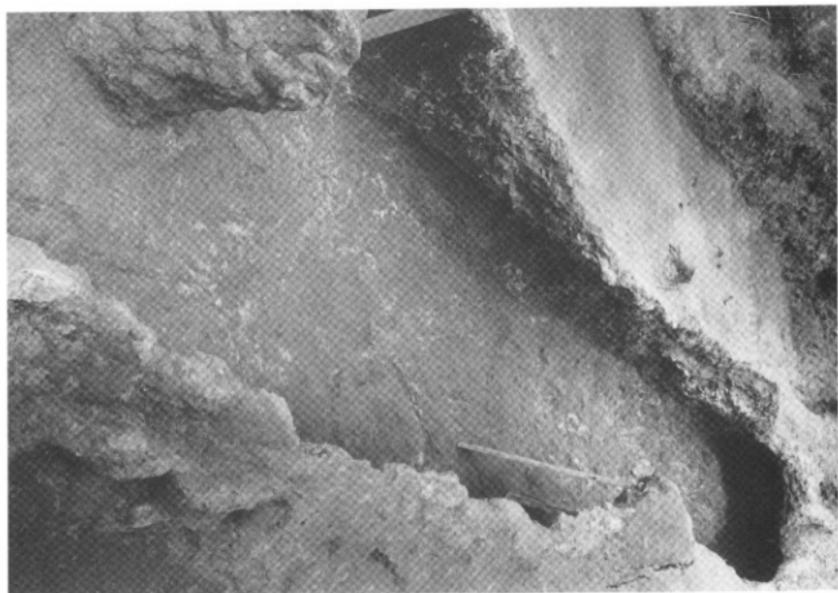


1 焚口・燃焼室

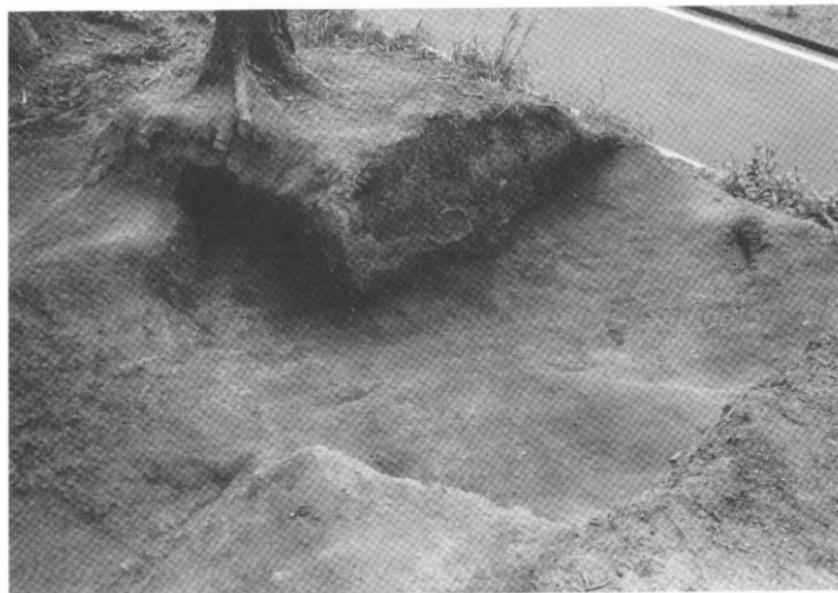


2 分焰柱

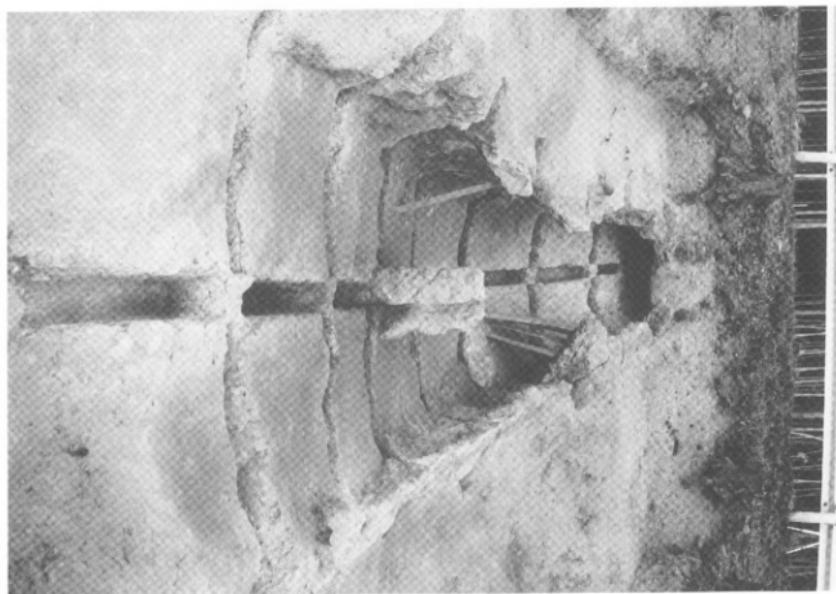
図版6 丸山1号窯



1 滾燒器床面露井状況



2 前庭部



1 丸山1号窯 断ち割り後全景



2 分塊柱 断ち割り後近景

圖版 8 丸山1号炭窯



丸山1号炭窯 全景

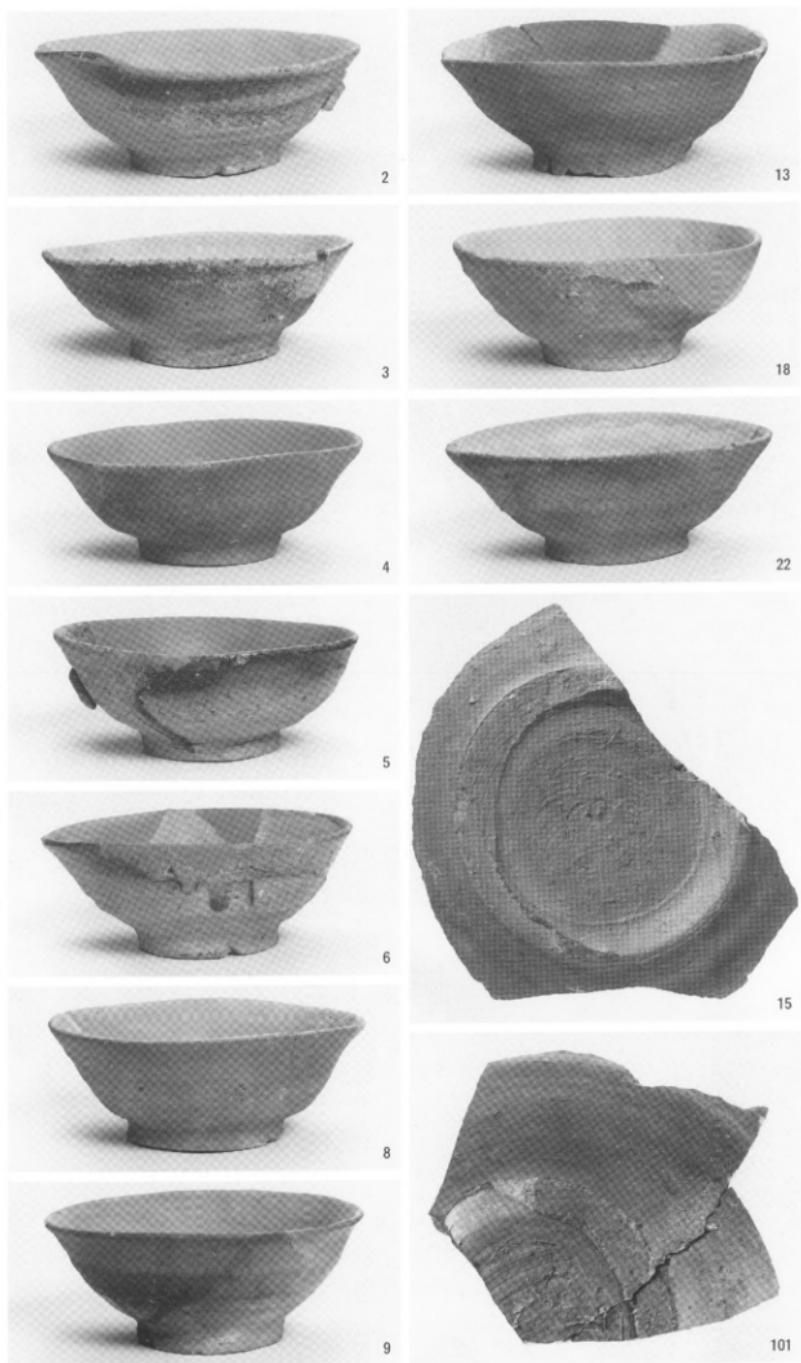


1 炭化室奥壁石積状況



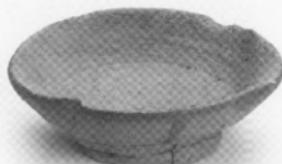
2 炭化室奥壁石積状況

図版 10
丸山 1 号窯(遺物 1)





24



28



25



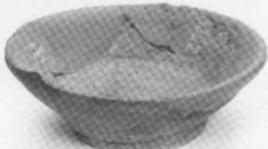
29



25



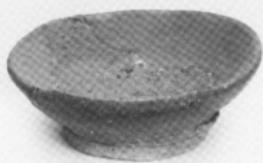
33



26



36



27



37



39



40



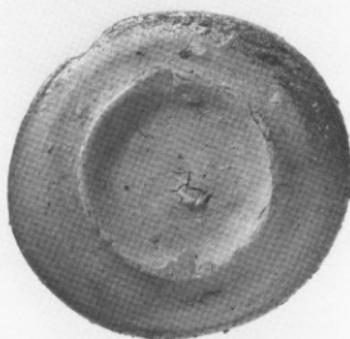
54



41



60



41



61



42



64



45



65



50



68

報 告 書 抄 錄

ふりがな	まるやま こようあと							
書名	丸山古窯跡							
副書名	平成7年度県道住吉・金谷線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第85集							
編著者名	丸杉 俊一郎							
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422 静岡県静岡市谷田23-20 TEL054-262-4261(代)							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 °, ′, ″	東経 °, ′, ″	調査機関	調査面積	調査原因	
まるやま こようあと 丸山古窯跡	しづかがくみん まるやまと 静岡県島田市 湯日中講	2229	34° 48' 16"	138° 10' 22"	19950901 19951031	400m ²	道路拡幅工事に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
丸山古窯跡	窯跡	平安時代末	「山茶碗」焼成窯1基	「山茶碗」 (碗、小碗、輪花小碗)	分煙柱も良好に残存しており、この時期の窯の構造を知る上で重要。			
		近世以降	炭窯1基・土坑1基					

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第85集

丸山古窯跡

平成7年度県道往吉・金谷線道路拡幅工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年3月31日発行

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422 静岡市谷田23-20
TEL054-262-4261
FAX054-262-4266

印 刷 中部印刷株式会社
静岡市下島426番地の1
TEL054-237-9133